

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊

# 津島岡大遺跡 7

— 第11次調査 —

(総合情報処理センター新営予定地)

1996年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊

# 津島岡大遺跡 7

— 第11次調査 —

(総合情報処理センター新営予定地)

1996年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

## 序

本報告書は、本学総合情報処理センター増築工事に伴い、1993年度に実施した発掘調査（津島岡大遺跡第11次調査）の成果をまとめたものである。

当地については1987年に試掘調査を行ったが、水田土壌と推定しうる堆積土のほかには遺構・遺物をみとめることができなかった。しかし、その後周辺地域において実施した発掘や試掘の結果からみて、当地についてもあらためて遺構の有無を確認しておく必要が生じていたのであった。

1993年秋から始まった発掘調査では、弥生時代に属する2枚の地層面において長方形区画の畦畔を有する水田遺構を確認したほか、さらに下層では縄文時代後期の炉跡を発見し、土器・石鏃とともに石鏃の製作過程を示すサヌカイト剥片がまとまって出土した。結果としては、試掘時の2ヶ所の坪掘りは今回の建物建設地の西端部の様子を探るにとどまっていたわけである。さいわい今回は本調査の実施によって重要な遺構を記録にとどめることができたのであるが、試掘調査時には、まだ正確な工事区域が確定していないことや狭い坪掘り調査そのものの限界もあって、遺構のあり方を十分に見通すことが困難な場合がおこる。とりわけ試掘調査と建設工事の時期が大きくずれる場合には、周辺地域での調査の進展状況を考慮にいれるなど、試掘結果の再評価が重要であることを痛感した。今後とも関係機関のご理解をお願いする次第である。

今回の発掘調査と報告書刊行にあたっては、本学の事務局および総合情報処理センターのご協力をいただいた。関係部局・各位に厚くお礼申しあげたい。

1996年2月

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長

稲 田 孝 司





## 例 言

- 1 本書は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが1993年9月14日より1994年1月11日までの期間で行った情報処理センター増築工事に伴う発掘調査の報告書である。調査地点は津島地区構内座標 AV—AW・11—12区に位置し、調査対象面積は640m<sup>2</sup>である。
- 2 発掘調査ならびに報告書作成までの諸作業は、管理委員会・運営委員会の指導のもとに行われた。委員・幹事の方々に御礼申し上げる。
- 3 本地点の調査概報は、『岡山大学構内遺跡調査研究年報』11としてすでに一部を報告しているが、細部にわたる事実関係は本報告書をもって正式のものとする。
- 4 整理作業は基本的に以下の分担でおこない遺物の基礎的な整理で片山純子・黒薮美代子・荻野早苗の協力を得た。  
遺物の実測および遺構の図版作成を阿部芳郎・富樫孝志が、遺物写真は阿部が行った。
- 5 本書の編集は、稲田孝司（センター長）、新納 泉（調査研究室長）の指導と助言のもとに、阿部が行い、阿部転出後は岩崎志保が補佐した。
- 6 発掘調査から報告書の作成にいたるまでの過程で以下の方々のご協力・ご指導をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略）  
犬飼徹夫 扇崎 由 山田昌久 前田光雄 出原恵二
- 7 本報告書に掲載した調査の記録類、出土遺物等は、すべて当センターで保管している。
- 8 本文中における表記および記述に関する凡例は以下の通りである。
  - a 遺物番号は、層位及び遺構単位に付してある。本文・図中の遺物番号は一致する。
  - b 遺物観察表は原則として実測図とセットとし、本文中に掲載した。
  - c 遺物観察表の数値の単位はすべてmmである。法量の欄では、残存部分が1/2以下のものには（ ）を付けている。
  - d 本報告書で用いる高度は標高であり、方位は真北を示す。
  - e 遺構名は文章・図・図版中で土坑：SK、溝：SDと略号化して使用している。
  - f 本報告書で掲載した1/50000の地図は建設省国土地理院発行の岡山北部・南部の図を合成したものである。

# 目 次

第1章 遺跡の立地と環境 .....	1
1. 歴史的環境 .....	1
2. 遺跡の立地と景観 .....	2
第2章 調査の経過と概要 .....	5
1. 調査の方法 .....	5
2. 調査組織 .....	5
3. 調査の方法と経過 .....	6
4. 調査の概要 .....	8
第3章 調査の記録 .....	10
1. 層序と地形 .....	10
2. 縄文時代の遺構と遺物 .....	13
3. 弥生時代の遺構と遺物 .....	21
4. 近世・近代の遺構と遺物 .....	26
第4章 調査の成果と課題 .....	28
1. 縄文後期のサヌカイト製石器群にみられる剥離面構成と技術（阿部芳郎） .....	28
総括 .....	41

## 図版目次

図1 周辺主要遺跡分布図	1	図17 11層上面水田実測図	22
図2 調査地点位置図	3	図18 11層出土土器実測図	23
図3 津島地区構内座標と各調査地点	6	図19 10層上面水田実測図	24
図4 グリッド設定図	7	図20 10層出土土器実測図	25
図5 主要検出遺構全体図	9	図21 3層上面検出遺構実測図	26
図6 土層断面の位置	10	図22 SD-1断面実測図	27
図7 土層断面図	11	図23 SD-1出土土器実測図	27
図8 12層上面検出遺構実測図	13	図24 石器の出土状態	29
図9 1号炉・ピット群実測図	14	図25 剥片にみられる折損部と打点の位置関係	31
図10 一号炉実測図	15	図26 小型剥片にみられる両極打法の痕跡	34
図11 SK-1・2実測図	15	図27 楔形石器の剪断面	34
図12 SK-3・4実測図	16	図28 石鏃の製作工程にみる素材と加工技術	36
図13 12層上面出土遺物実測図	17	図29 大型剥片石器にみられる両極打法の痕跡	38
図14 11～12層出土土器実測図(1)	18		
図15 11～12層出土土器実測図(2)	19		
図16 11～12層出土土器実測図(3)	20		

## 写真目次

写真1 調査地点遠景	3	写真4 10層上面水田調査状況	25
写真2 2層上面検出遺構	8	写真5 暗渠(SD-1)断面	27
写真3 基本土層	10		

## 巻末写真図版

図版一 弥生時代水田検出状態

1. 11層上面水田検出状態

2. 12層上面水田検出状態

図版二 縄文時代石器(1)

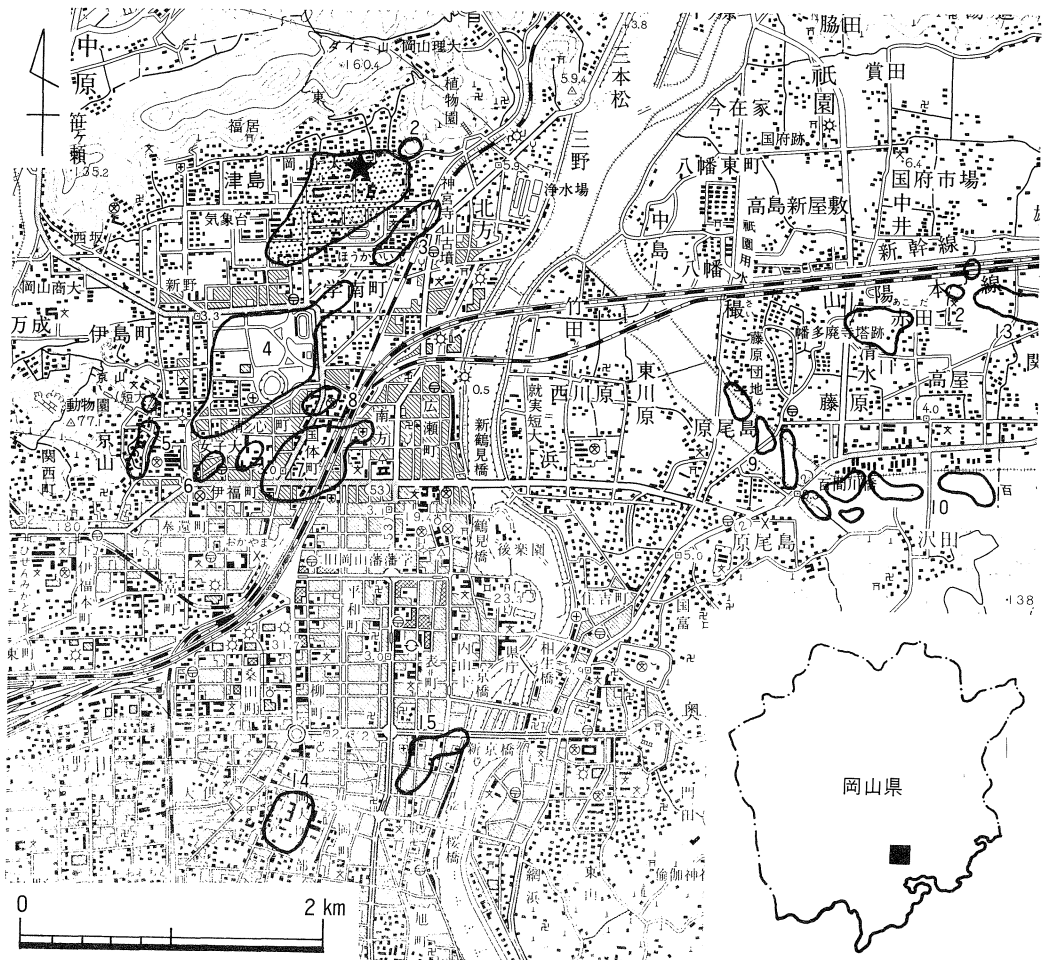
図版三 縄文時代石器(2)



## 第1章 遺跡の立地と環境

### 1. 歴史的環境

津島岡大遺跡は、岡山大学津島キャンパス内に存在する遺跡の総称である。遺跡は岡山平野の北部、岡山平野を南流する旭川の西岸に位置しており、旧地形では旭川とその支流によって形成された微高地上に位置している（図1）。



- |                      |                  |                      |
|----------------------|------------------|----------------------|
| 1. 津島岡大遺跡(縄文後期～近世)   | 2. 朝寝鼻貝塚(縄文後期)   | 3. 津島江道跡(縄文晩期～弥生)    |
| 4. 津島遺跡(縄文晩期～中世)     | 5. 上伊福西遺跡(弥生後期)  | 6. 上伊福西遺跡(縄文晩期～弥生)   |
| 7. 南方遺跡(弥生～中世)       | 8. 絵図町遺跡(弥生)     | 9. 百間川原尾島遺跡(縄文後期～中世) |
| 10. 百間川沢田遺跡(縄文後期～近世) | 11. 赤田西遺跡(弥生～古墳) | 12. 雄町遺跡(縄文晩期～古代)    |
| 13. 乙多見遺跡(弥生)        | 14. 鹿田遺跡(弥生～中世)  | 15. 天瀬遺跡(弥生中・後期)     |

図1 周辺主要遺跡分布図(縮尺1/50,000)

縄文海進以後、旭川は河口付近に土砂を堆積して微高地を形成し始めた。これが岡山生野の始まりである。縄文時代後期には当遺跡に隣接して朝寝鼻貝塚<sup>1)</sup>があるように、当時の海岸線はキャンパスのすぐ近くに迫っていたようである。岡山平野に遺跡が認められるようになるのは縄文時代後期からである。縄文時代後期になると微高地が発達し、当遺跡第3<sup>2)</sup>・5次調査<sup>3)</sup>や百間川沢田遺跡<sup>4)</sup>では縄文時代後期～晩期の土器・石器郡の他に貯蔵穴・土坑・炉跡などが発見されており、微高地を舞台にして活発な生業活動が展開したことがうかがえる。

弥生時代に入ると微高地がさらに発達し、微高地部分は居住域、傾斜部から低湿地にかけては水田として利用されるようになる。弥生時代前期には確実に集落ととも水田が形成されるが津島江道遺跡<sup>5)</sup>では前期の水田のわずかに下層から突帯文土器の時期まで遡る可能性の水田が発見されている。津島遺跡では前期では竪穴式住居とともに小規模な水田が検出された。当遺跡では集落は未発見であるが、第3次調査で前期水田の良好な例が検出されている。また、百間川沢田遺跡では前期の環濠集落・水田が発見されている<sup>6)</sup>。弥生時代中期中頃になると遺跡数が激増する。雄町遺跡<sup>7)</sup>や南方遺跡<sup>8)</sup>の他に、鹿田遺跡<sup>9)</sup>など岡山平野南部の海岸沿いにも集落が認められる。後期になると遺跡の規模・数ともにさらに拡大する。百間川原尾島遺跡<sup>10)</sup>では多数の住居や掘立柱建物、発達した水田が発見されており、海岸沿いでも鹿田遺跡・天瀬遺跡<sup>11)</sup>などで安定した集落が認められる。これらの遺跡は分布や地形区分を手がかりにしていくつかの群に分けることができる<sup>12)</sup>。当遺跡や津島遺跡・百間川遺跡群を中心とした北部地域と鹿田遺跡・天瀬遺跡を中心とした南部地域があり、さらに北部地域は旭川本流によって当遺跡と津島遺跡・上伊福遺跡<sup>13)</sup>などを中心とした地域と百間川遺跡群・雄町遺跡などを中心とした地域に分けることができる。北部地域では水田が発達しているのに対し、南部地域では石錘や製塩土器が多く認められるなど、両者では生業の内容に違いが認められる。

以上のように、岡山平野では旭川の沖積作用によって微高地が形成され、それに伴って縄文時代後期以降、微高地部分での人間活動が活発になり、弥生時代にはいると前期から安定した農耕社会が成立する。当遺跡は縄文時代後期から遺跡の形成が始まり、弥生時代前期には水田が形成され、それが古墳時代以降、現在に至るまで連続するように、岡山平野北部における継続的な生業活動の痕跡を認めることができる。(富樫)

## 2. 遺跡の立地と景観

縄文海進以後、海退とともに旭川の河口に土砂が堆積し、岡山平野の形成が始まった。低地に流れ込んだ旭川は何本もの支流に分岐し、土砂を堆積して平野を拡大していくとともに複数の支流と微高地が入り組んだ複雑な地形を作った。微高地にはタデ科やカヤツリグサ科などの湿地性の植物とともにクワやセンダンなどの疎林が広がっていたと推定される<sup>14)</sup>。このような微



高地は縄文時代後期以降、人間活動の舞台となった。

津島岡大遺跡はすぐ北に標高150m程の半田山山塊を控え、その南に広がる沖積平野に立地している（写真1）。過去10次にわたる調査が行われ、縄文時代後期以降の遺構・遺物が発見されている。縄文時代後～晩期の遺構・遺物としては次のようなものがある。

1. 微高地上の土坑・炉跡：第6<sup>15)</sup>・7<sup>16)</sup>・8<sup>17)</sup>次調査で確認された。遺物は僅少。
2. 微高地斜面～旧河川沿いの貯蔵穴：第3・5・6・9<sup>18)</sup>次調査で確認された。湿地に近いところに数基から十数基の貯蔵穴が密集している。
3. 微高地上の居住域：第2<sup>19)</sup>・5次調査の結果から推定される。第5次調査では河道斜面から彦崎K2式直前の土器、石器群が出土した。ともに安定した組成を示し、搬入土器や土製装飾品なども認められることから、近隣の微高地上に居住域の存在を推定できる。

このように、地形との関係で様々な活動痕跡が認められ、当遺跡に隣接する朝寝鼻貝塚と併せて、当遺跡は人間活動の1つの拠点になっていたと考えられる。

弥生時代にはいと微高地部分が拡大し、微高地の周縁部分が水田域として利用されるようになる。第3次調査では前期、後期の良好な水田を検出している。第5・7次調査でも後期の水田を検出しており、微高地の周縁部分には弥生時代を通じて水田域が広がっていたと考えられ

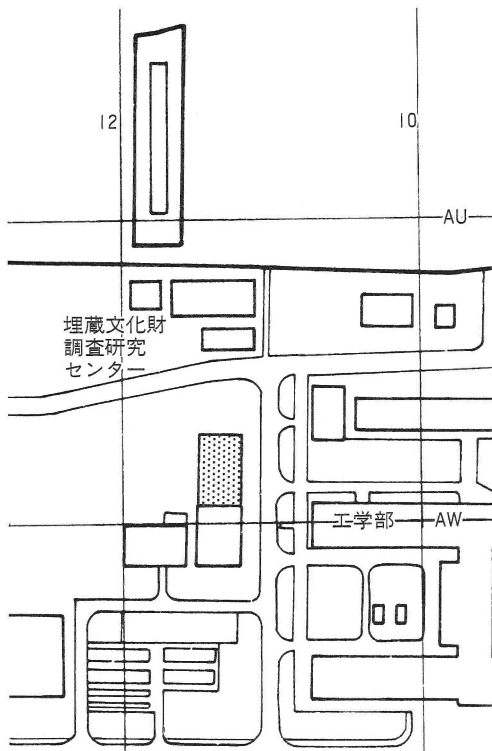


図2 調査地点位置図 (1/2500)



写真1 調査地点遠景

る。第8次調査では微高地とその周縁で弥生時代の溝群を検出し、水田管理に関係するものと考えられる。第10次調査<sup>20)</sup>では微高地部分を調査したところ、後期初頭を中心とする土坑群を検出し、ごく近いところに集落が存在したと推定される。

弥生時代以降も近代に至るまでの田畑が検出されており、農耕社会の継続が認められる。

このように津島岡大遺跡では縄文時代後期以降、旭川の支流によって形成された微高地を中心として、各時代を通じて様々な生業活動が行われていたと考えられる。

今回の調査区は津島岡大遺跡の中では北側に位置している(図2)。事前の試掘調査の結果、黒色土上面のレベルが2.2mと他の地点に比べて低いことから、この付近では湿地のような状態であったと推定される。また、別の立会調査では、キャンパスの北側で黒色土とその上の層が粘土化しているのが認められたことから、キャンパスの北側から半田山の麓にかけては微高地の後背湿地が広がっていたと考えられている。以上のことから、今回の調査区は微高地から低湿地に至る斜面部の中で低湿地に近い所に位置していると考えられる。(富樫)

## 註

- 1 鎌木義昌 亀田修一「朝寝鼻貝塚」『岡山県史 第十八巻 考古資料編』1986年
- 2 山本悦世『津島岡大遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1991年
- 3 阿部芳郎『津島岡大遺跡4』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994年
- 4 平井 勝「四元調査区」『百間川沢田遺跡3』岡山県教育委員会 1993年
- 5 「津島江道遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会 静岡大会実行委員会ほか 1988年
- 6 岡山県古代吉備文化財センター編『百間川沢田遺跡3』岡山県教育委員会 1993年
- 7 正岡睦夫ほか『雄町遺跡』岡山県教育委員会 1972年
- 8 『南方(国立病院)遺跡発掘調査報告』岡山市遺跡調査団
- 9 吉留秀敏 山本悦世『鹿田遺跡I』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1988年
- 10 岡山県文化財保護協会編『百間川原尾島遺跡2』岡山県文化財保護協会 1984年
- 11 出宮徳尚「天瀬遺跡」『岡山県史 第十八巻 考古資料編』1986年
- 12 松木武彦「岡山県における弥生—古墳時代の地域集団」『鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1993年
- 13 中野雅美「上伊福(ノートルダム清心女子大学構内)遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告14』岡山県教育委員会 1994年
- 14 註2参照
- 15 土井基司「工学部生物応用工学科棟新営にともなう発掘調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報6』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1989年
- 16 絹川一徳「工学部情報工学科棟校舎新営に伴う発掘調査」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1989年
- 17 富樫孝志編『津島岡大遺跡5』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995年
- 18 松木武彦「津島岡大遺跡第9次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報10』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1992年
- 19 吉留秀敏 栄 一郎編『岡山大学津島地区遺跡群の調査II』岡山大学埋蔵文化財調査室 1986年
- 20 松木武彦「津島岡大遺跡第10次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報11』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1992年

## 第2章 調査の経過と概要

### 1. 試査に至る経過

津島地区に所在する総合情報処理センターの増築計画に伴い、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を1987年に実施した。調査地点は既設の総合情報処理センター建物の北側隣接地域である(図2)。南北方向に細長い対象敷地内の、南西と北西側に2ヵ所の試掘坑を設定して最深部で現地表下3.6mまで掘り下げ、埋蔵文化財の有無を確認した。その結果、水田土壌の堆積が認められたが遺構・遺物は確認できず、黒色土の存在が指摘された上で、この段階では、遺構や遺物の存在は希薄であると判断された<sup>1)</sup>。

その後、津島地区では比較的大規模の発掘調査が相次ぎ、縄文時代から弥生時代前期にかけて微高地周辺に堆積した黒色土には、水田畦畔等の遺構が良好な状況で残る可能性が高いことが明らかになってきた。そのため本調査地点についても試掘調査の結果を見直すこととなり、黒色土上面・下面に重点をおいた調査が必要であるということとなった。

そうした状況の中、1993年に建築計画が具体化したため、1993年9月14日より本調査を開始した。(阿部)

註1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『岡山大学構内遺跡調査研究年報5』1988年P30

### 2. 調査組織

管理委員	小坂二度見(学 長)	岡部 喬(教養部長)
	工藤進思郎(文学部長)	古川 隆夫(文化科学研究科長)
	伊澤 秀而(教養学部長)	早津 彦哉(自然科学研究科研究部長)
	江口 三角(法学部長)	兼久 勝夫(資源生物科学研究所所長)
	神立 春樹(経済学部長)	好並 隆司(附属図書館長)
	岩見 基弘(理学部長)	松尾 信彦(医学部附属病院長)
	新居 志郎(医学部長)	松村 智弘(歯学部附属病院長)
	中後 忠男(歯学部長)	本間 弘次(地球内部センター長)
	田坂 賢二(薬学部長)	松浦 正義(学生部長)
	河野伊知郎(工学部長)	喜多嶋康一(医療技術短期大学部長)
	河津 一儀(農学部長)	伊藤 公紘(事務局長)
幹 事	山口健太郎(庶務部長)	北原 賓(施設部長)
運営委員	稲田 孝司(センター長)	千葉 喬三(農学部教授)

狩野 久 (文学部教授)	定兼 範明 (教養部教授)
高重 進 (教育学部教授)	新納 泉 (調査研究室長)
村上 宅郎 (医学部教授)	北原 賓 (施設部長)

調査主体 小坂二度見 岡山大学学長

調査総括 稲田 孝司 埋蔵文化財調査研究センター長 (文学部教授)

新納 泉 埋蔵文化財調査研究センター調査研究室長 (文学部助教授)

調査員 阿部 芳郎 埋蔵文化財調査研究センター調査研究員 (文学部助手)

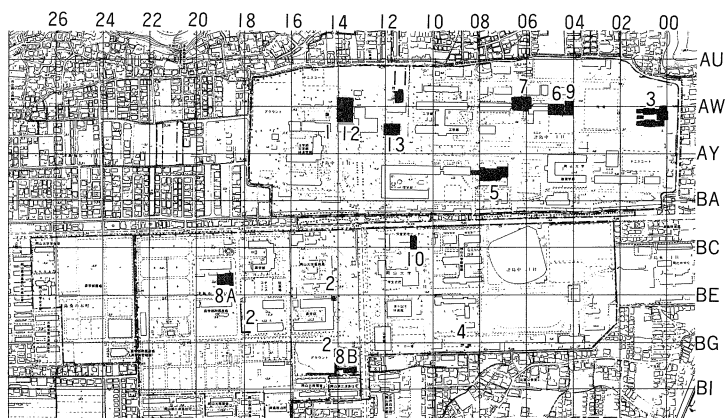
富樫 孝志 埋蔵文化財調査研究センター調査研究員 (文学部助手)

### 3. 調査の方法と経過

#### a. 構内座標の設定と区割り

津島地区構内には、国土地理院第Ⅴ座標系の南北軸座標値 ( $X = -144,500\text{m}$ ) と、東西軸座標値 ( $Y = -37,000\text{m}$ ) を原点とした構内座標を設定している。その軸方向は、本地区の全体的な敷地の方向が、市街地中央部において認められる正方位の条里地割りと一致し、ほぼ東西南北に合致していることから、真北に合わせている。そして、原点から一辺50mの間隔で方形に区切り、南北軸は北からAA～BG線、東西軸は東から00～48線として、50m四方の一区画は、その東北角で交わる二方向の軸線名を組み合わせ、AA00区のごとく呼称する (図3)。原点は半田山山塊の一部が大学の敷地内に含まれるため、キャンパスから約900m北に位置している。

本調査区は構内座標AV～AW・11～12区に位置する。調査にあたっては構内座標を基本にして調査区内に5×5mのグリッドを設定し、東西列にはアラビア数字を東から、そして南北方向にはアルファベットの小文字を北から付し、a-1区というよう



に個々のグリッドを呼称することにした (図4)。

1. 小橋法目黒遺跡	2. 農学部構内	3. 男子学生寮予定地	4. 屋内運動場
5. 大学院自然科学研究科棟	6. 工学部生物応用工学科棟	7. 工学部情報工学科棟	
8. 遺伝子実験施設	9. 工学部生体機能応用工学科棟	10. 保健管理センター	
11. 総合情報処理センター (本調査地点)	12. 附属図書館	13. 福利厚生施設北棟	

図3 津島地区構内座標と各調査地点 (縮尺1/15,000)

## b. 調査の方法と経過

発掘調査は明治時代に造成された客土を重機により掘削し、2層とした近代の面から下層を人力により調査した。調査区内にはグリッドラインを利用して東西と南北の2方向に直行する土層観察用のベルトを設定した。

出土遺物の取り上げは、基本的にはグリッドを最小の単位として層位毎に取り上げた。ただし水田層や耕作土層などで、遺物の原位置が二次的な移動を伴うと判断できる部分については層位毎に一括した。また遺構の内部や、空間的に分布上のまとまりをもつ遺物については、原位置を記録して取り上げた。

調査面は調査区全域の土層の堆積状態を土層観察用のベルトと周囲の側溝内で確認しながら、基本的には層位毎に掘り下げをおこない、各層

において遺構の検出と精査をおこなった。水田遺構の検出に注意を払い臨んだが、明確に水田の構造を確認できたのは、弥生時代の2面のみであった。ただし、中近世層から古代に相当する層中においても、鉄分やマンガンの沈着面が数枚確認できたので、長期にわたり水田が経営されたものと推測できる。また12層上面で発見された小穴についても黒色土全体に広がる植物生痕などと区別するために、ピット確認の調査をおこない、明らかな攪乱の小穴を区別した。さらに柱痕の有無を確認するために、すべてのピットの確認面の土質を観察し半截をおこなった。

発掘調査は調査員2名が担当した。調査面積は640㎡、調査期間は1993年9月14日～1994年1月11日までである。

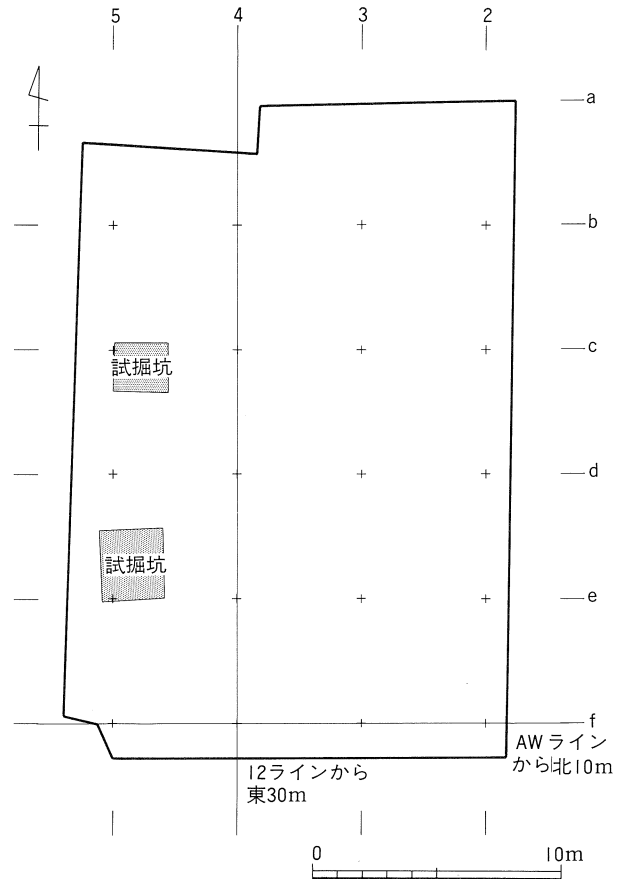


図4 グリッド設定図（縮尺1/300）

#### 4. 調査の概要

**近世の畑** 2層上面において調査区の全面にわたり、南北方向に走る畝および鋤跡を確認した(写真2)。2層の最上面はこの畝による起伏を残し、畝は調査区の全体に途切れることなく連続している状況から、一枚あたりの耕地は本地点より大きく、南北方向に作付けが行われたことが推測される。また3層上面から、南北方向に走る溝が検出されている。溝には拳大の礫が詰め込まれ、畑の排水機能がうかがえる。



写真2 2層上面検出遺構

**水田遺構** 4層以下は中世・古代の遺物をほぼ層位的に出土する土層の堆積が認められたが、遺物はいずれも小破片に限られ、遺構は検出できなかった。ただ、土層の断面には数枚の鉄分やマンガンの沈着面が認められた事実から、その多くは水田経営による土壌堆積と思われる。同様の土地利用形態は、10層と11層上面においても認められ、ここでは畦畔が比較的その構造を良く残した状態で確認できた。

10層は上面を砂質に富む層(9層)に覆われ、調査区の全面に畦畔が良好な状態で検出された。水田面は南東方向に高い微地形に対応し、小区画の水田の長辺を等高線に平行させるようにして構築されていた。

11層上面の水田も基本的には上層の水田と同じく、南東が高い微地形に対応するような小区画の構造をもつが、残りは良好とはいえない。しかし、調査区の中央北より不整形の大きな窪地が検出され、その覆土に水成堆積層をまじえる点から、水田の構築時には池状の窪地となっていたことが推測された。それが意図的な貯水であったかは推測の域を出ない。

**土坑・ピット群** 12層は黒色土上下の黄褐色土層である。黒色土中における小規模な遺構の検出は困難を極めたため、本層の上面において最終的な遺構確認をおこなった。その結果、多くの落ち込みを確認したが、大半は植物等の攪乱やシミ状の色調変化であり、それらについては一部のみの調査で終了した<sup>2)</sup>。半截の結果、それらの明確な構造や機能を明らかにし得ないままでも、人工的なものと判断できる可能性のあるものについて精査した。それらは炉址1基・不整形の浅い土坑4基・柱穴状のピット群である。炉址は長径80cm・短径50cmの範囲に焼土粒・木炭粒が広がるもので、周辺には被熱変化部分が認められた。また、調査区北側を中心にして縄文時代後期前葉の土器やサヌカイト製の石器と剥片類がまとまって出土している。(阿部)

註2 小規模な落ち込みの調査法は津島岡大遺跡8次調査B地点の方法に基づいた。富樫孝志『津島岡大遺跡5』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995年 P54





図5 主要検出遺構全体図 (縮尺1/200)

## 第3章 調査の記録

### 1. 層序と地形

#### a. 層序 (図7、写真3)

- 1層：造成土であり、本地区が1906～1907（明治40～41）年に陸軍駐屯地として造成された際の推積土である。
- 2層：青灰色粘質土で、近代の耕土と考えられる。上面はほぼ平坦で、標高3.0～3.1mである。
- 3層：暗黄褐色を呈する微砂の混じる土層である。上面の標高は2.9～3.0mである。この層の上面では、南北方向に走る溝と鋤痕が検出された。所属時期は近世である。
- 4層：暗灰色粘質土で、鉄分の沈着が認められる。標高2.7～2.8mである。出土遺物は少ないが、近世～中世に属すると考えられる。
- 5層：暗青灰色粘質土で、4層よりも若干暗い。上面の標高2.6～2.7mである。中世後半に位置づけられる。
- 6層：暗黄灰色を呈する砂質に富んだ土層で、鉄分・マンガンの沈着が認められる。上面の標高2.45～2.6mである。中世に属すると考えられる。
- 7層：暗青灰色粘質土で、基本土層1～10層中で粘質は最も強い。上面の標高2.35～2.5mであ

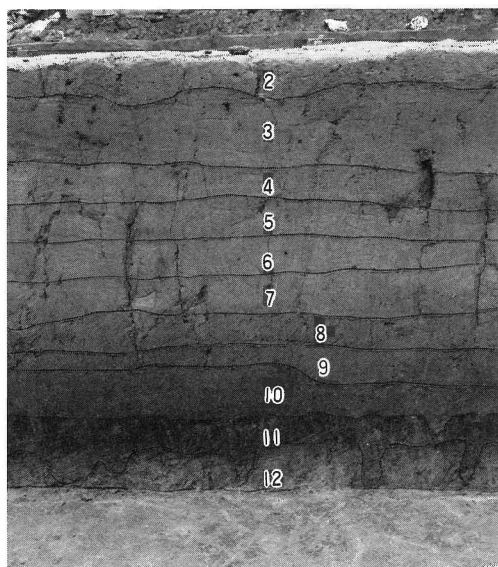


写真3 基本土層

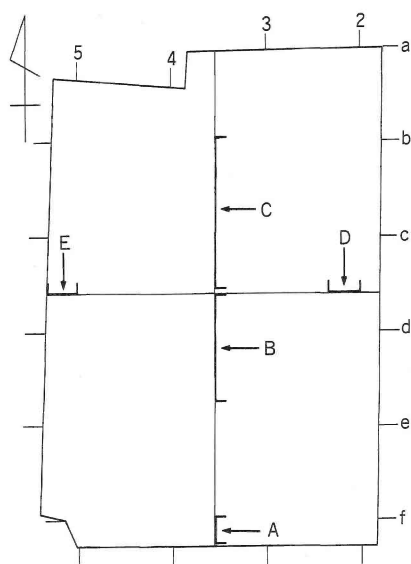


図6 土層断面の位置 (縮尺1/400)

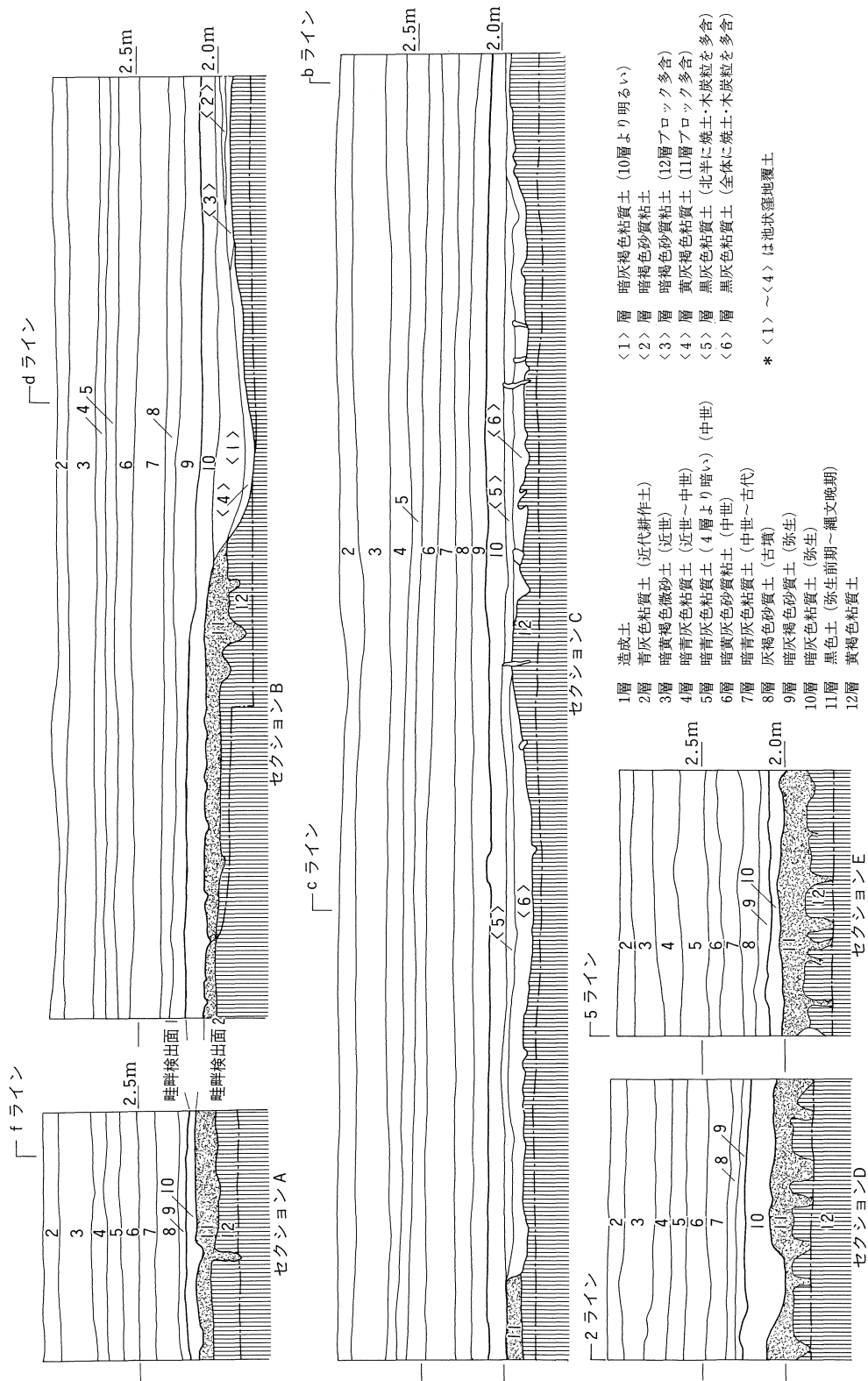


図7 土層断面図 (縮尺 1/40)

る。遺物の出土は少ないが、古代と考えられる。

8層：灰褐色砂質土で、マンガンの沈着が散漫であるが、認められる。上面の標高2.25～2.4mである。遺物は少ないが、須恵器・土師器片から古墳時代に属すると考えられる。

9層：暗灰色を呈する砂質に富んだ土層で、粘性は弱い。10層を覆う直上の砂層である。上面の標高2.1～2.25mである。洪水砂層の可能性も考えられる。遺物は少ないが10層との関係から弥生時代後期以降の時期に位置けられる。

10層：暗灰色粘質土で、水田層である。マンガンの沈着が認められる。上面で水田畦畔が良好な状態で検出された。上面の標高は2.0～2.2mである。10層中からは、弥生時代中期の土器小片が出土している。水田の所属時期は弥生時代後期を上限と考えられる。

11層：黒色土である。上面で水田畦畔・池状窪地が検出されている。上面の標高2.0～2.15mである。縄文時代晩期～弥生時代前期の土器片を出土している。

調査区の中でも標高の低い北端部分にのみ、11層から12層への漸移層と考えられる黒褐色粘質土層の推積が認められた。これを11層の局所的な亜層ととらえ、前者を11a層、後者を11b層とした。

12層：黄褐色粘質土で、粘質が強く、部分的に黄灰色の粘土ブロックを含む。上面の標高は1.85～2.0mで、南東方向が高く、やや起伏のある地形となっている。この層の上面では炉址・土坑ピットが検出されており、縄文時代後期の土器片が出土している。

#### b. 地形

調査地点の現況は明治時代の造成により平坦に修正されているが、現在までの試掘や立会調査により、今回の調査地点の北西方向には湿地が存在したことが予測されており<sup>1)</sup>、現況とは異なる複雑な地形が時代を違えて展開したことが明らかにされつつある。

今回の調査においても、そうした地形の変遷を示唆するいくつかの知見が得られている。調査地点の全面を覆う標準的な土層は、調査終了面とした黄褐色粘質土層までで12枚を識別した。それによるならば、3層とした層には畑の畝面が一面に展開し、その面には暗渠排水の施設が南北に走る点から、湿性の高い耕地であったと思われる。近世から中世・古代にかけての土層は砂質に富むグライ化の進んだ土壌であり、水田土壌と考えられる。弥生時代では明確な構造を残す水田址が2面検出されたが、いずれも南北方向を最高所とした微地形を利用した構造をもつ。この地形は12層とした基盤層上面においても確認でき(図8)、北西に緩やかな傾斜をもつ点から、傾斜は北西方向に広がる湿地に向かう地形変換を反映したものと推測される。

(阿部)

註1 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『岡山大学構内遺跡調査研究年報10 1992年度』1993年 p15 調査②

## 2. 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構には12層上面で検出した炉址・土坑・ピットがある。土坑・ピットのうち埋土に11層の黒色土に酷似した土を含むものは、さらに上の層から掘り込んだものと思われ弥生時代前期以降の可能性もある。しかし、明確な共伴遺物もないためここで一括して記載する。

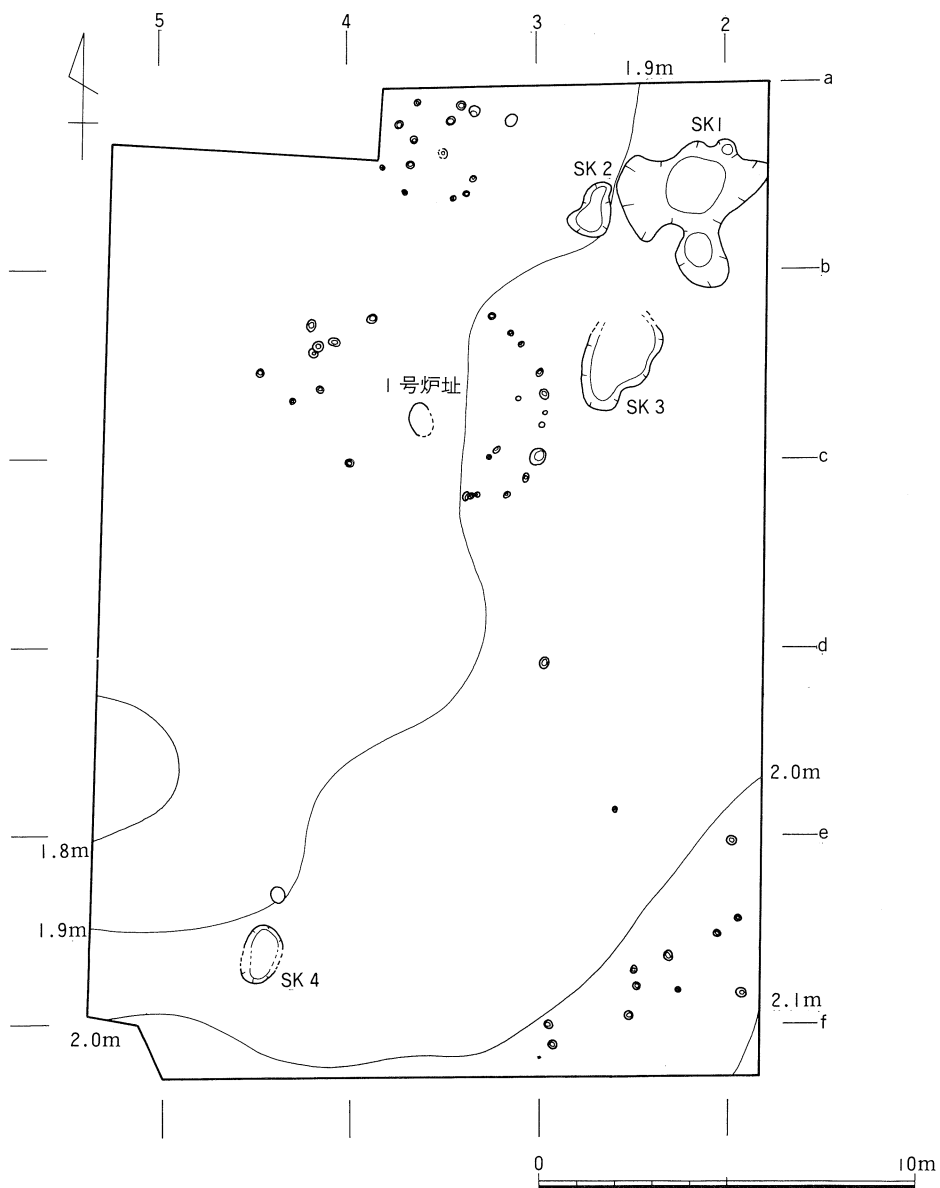


図8 12層上面検出遺構実測図（縮尺1/200）

炉址 (図9・10)

b-3区で検出された。深さ5cmほどの浅い掘り込みの周囲に、焼土が土手状に取り巻き、長径80cm、短径50cmの範囲に木炭と焼土粒が広がる。遺物は出土していない。炉址は切り割りをおこない、その結果、火床面下部の12層に赤化と黒化の被熱痕跡を認めることができた。



図9 1号炉・ピット群実測図 (縮尺1/100)

ピット規模一覧 (単位: cm)

NO.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	b	c	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37
深度	8	15	18	18	7	17	22	15	13	9	12	13	11	12	18	20	20	20	20	15	10	20	18	25	24	12	10	15	15	34	20	25	20	26	15	15	10	14	23
最大径	16	28	24	24	20	27	26	20	16	22	14	13	16	19	22	28	32	28	14	17	28	26	28	32	34	12	20	23	32	40	38	40	34	36	19	21	22	24	20



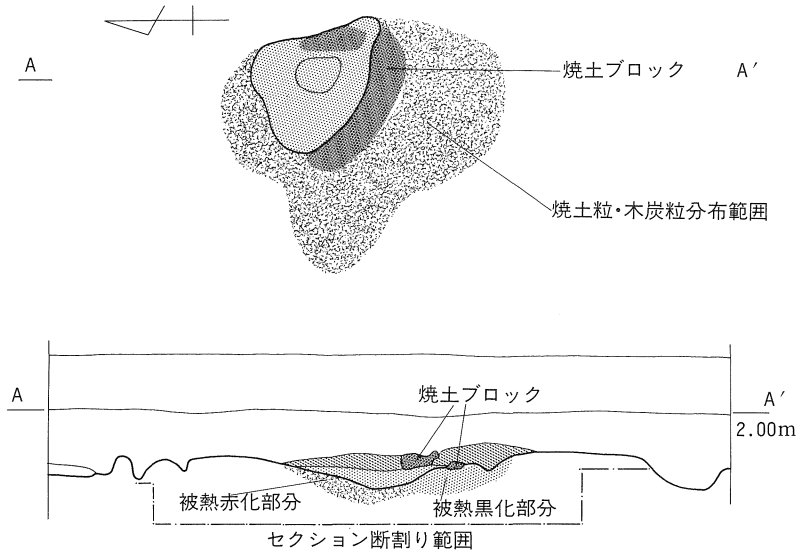


図10 1号炉実測図 (縮尺 1/20)

炉址の周辺では後述するようにピットが十数基検出された。ピット半裁の結果から、それらが植物による攪乱ではなく、柱の痕跡を示す有機質の土層が、中心部に観察される点から、柱穴としての機能が推測できる。  
(阿部)

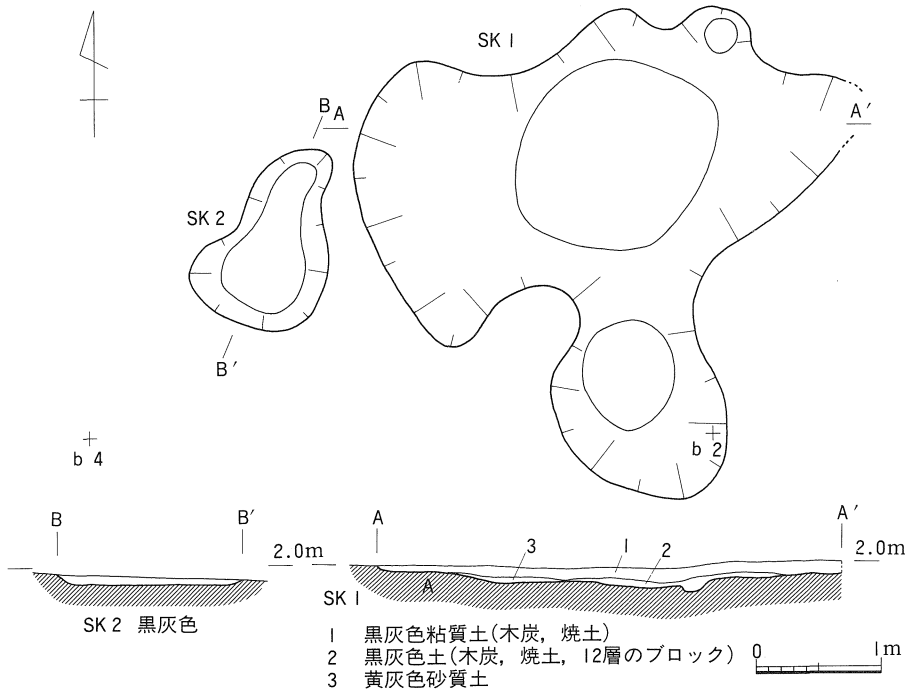


図11 SK-1・2実測図 (縮尺 1/60)

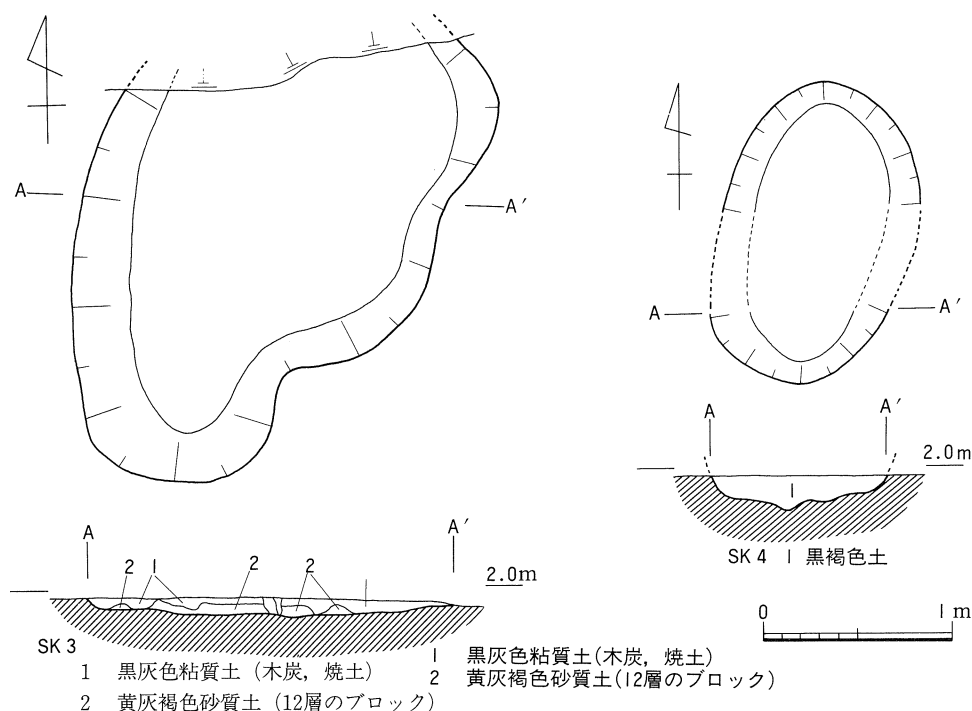


図12 SK-3・4実測図（縮尺1/40）

### 土坑とピット群（図11・12）

**SK 1** a-2区で検出された。検出面のレベルは1.95m、底面レベルは1.87mで平面の大きさの割には浅い。埋土は本炭・焼土を含んでいる。平面形が不定形のため、複数の土坑が切り合っている可能性も考えたが、精査の結果単独の土坑と判断した。遺物は出土していない。

**SK 2** a-2区、SK 1に隣接して検出された。検出レベルは1.91m、底面レベルは1.85mである。埋土は黒灰色土で木炭・焼土などは含んでいない。遺物は出土しておらず、これは自然の落ち込みの可能性もある。

**SK 3** b-2区で検出された。検出面のレベルは1.96m、底面のレベルは1.92mである。埋土は木炭・焼土を含んでいる。平面形は歪んだ楕円形である。遺物は出土していない。

**SK 4** c-4区で検出された。検出レベルは1.92m、底面レベルは1.80mで楕円形を呈する。埋土は黒褐色土の単純土層で。遺物は出土していない。

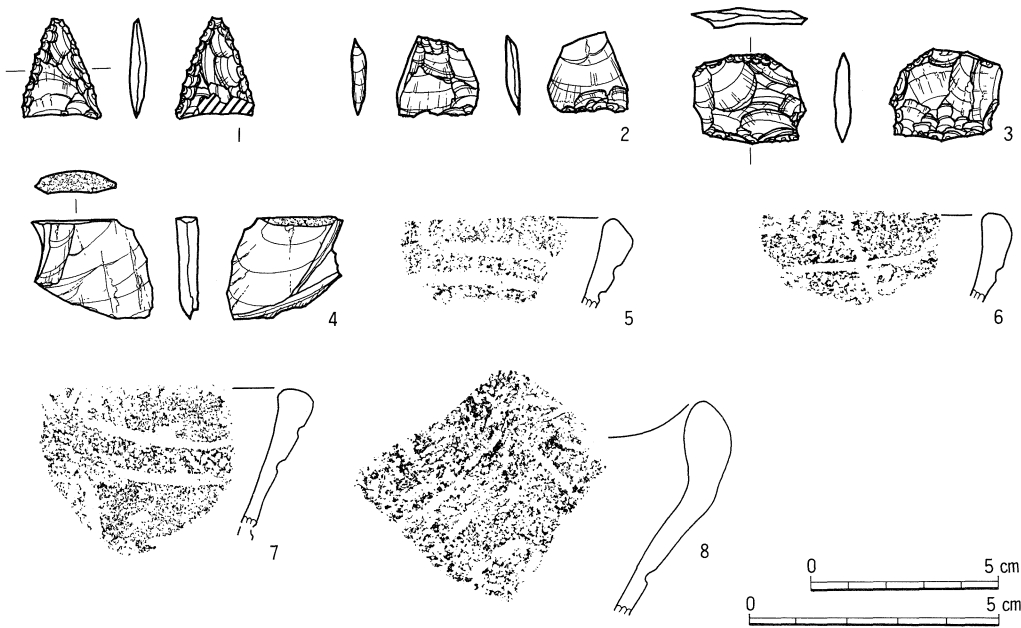
**ピット** 調査区北端で13基、中央部で26基、南東部分で17基が検出された。すべて半載して自然の落ち込みかどうかの検証を行った。検出レベルは2.0m前後、深さ7～34cm、径12～40cmと規模は様々である。埋土は黒灰色～黒褐色土で共通している。組み合うものはなく、遺物は出土していない。

12層上面出土遺物（図13、図版二）

1～3はサヌカイト製の石器である。1は石鏃で基部の一部を破損するが、抉りの浅い無茎鏃である。2は薄手の剥片の上下端に細かな加撃痕が観察される。正面観の左側面には縦位に裂ける様な剥離面が残る。両極打法による特徴的な痕跡を示す。3も同様の剥離面を残す。利器か小型の石器の未製品か検討を要する資料である。4は自然面を打面とする剥片である。厚手の剥片が剥離されているが、ねじ折ったように折損している。

5～8は縄文土器である。個体は異なるが、いずれも口縁部に横位の沈線を引く。7・8を参考にするならば、2本の沈線により区画された内部に縄文を充填するものと思われる。8は波状口縁で波頂から左右に縄文帯が描かれ、波頂直下に渦巻文が配されるようである。口縁端部が肥厚する共通の特徴がある。これらは後期前葉に比定できるであろう。

出土した遺物は、出土位置を垂直投影すると大半が11層下部から12層上面に密着していることがわかる（図11）。



遺物番号	出土地点	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	a-3	石鏃	サヌカイト	20	16	3	0.7	基部一部欠損
2	a-3	楔形石器	サヌカイト	16	17	2	0.8	薄手の剥片の上下端部に両極打痕あり
3	a-3	楔形石器	サヌカイト	18	23	4	1.7	切断面を打面として周縁から加撃する
4	a-3	剥片	サヌカイト	21	23	4	2.8	自然面を打面とする

遺物番号	出土地点	器種	部位	口径・底径	文様・調整の特徴	色調	備考
5	a-3	深鉢	口縁部	—	沈線—縄文?	黄褐色	内外面の風化が顕著
6	a-3	深鉢	口縁部	—	沈線—縄文?	黄白褐色	内外面の風化が顕著
7	a-3	深鉢	口縁部	—	沈線—縄文 (LR)	暗黄色	内面の風化が顕著
8	a-3	深鉢	口縁部	—	沈線—縄文 (風化)	灰褐	内外面の風化が顕著

図13 12層上面出土遺物実測図（縮尺1～3：2/3，5～8：1/2）

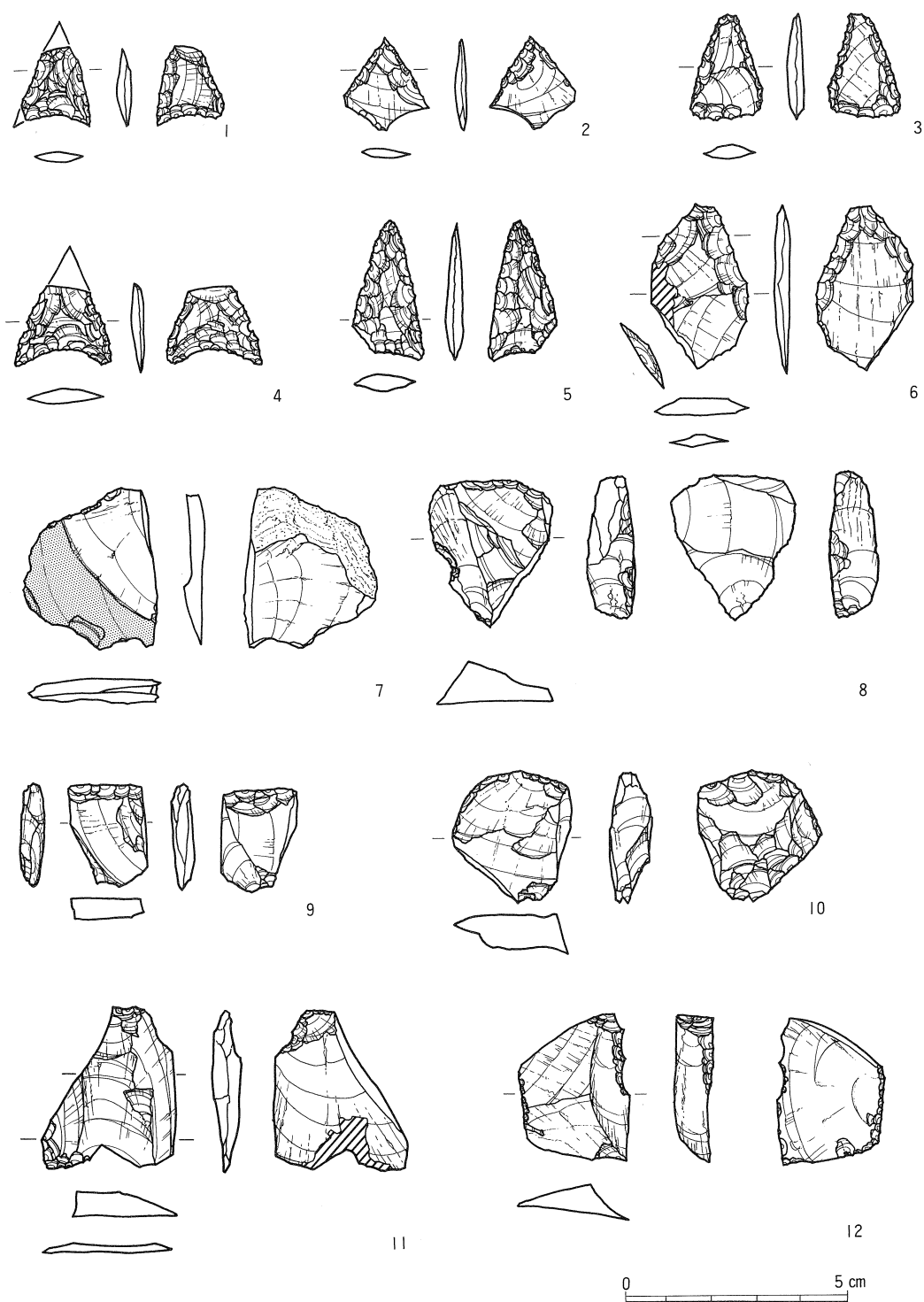
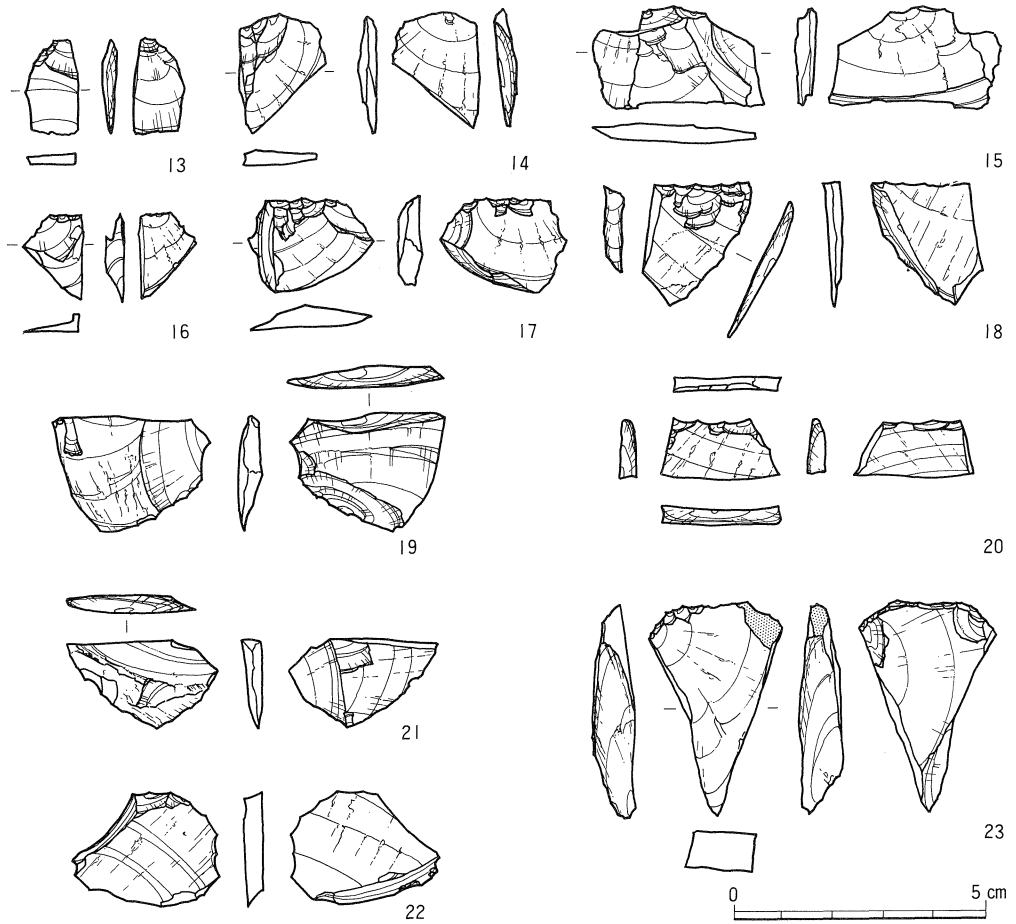


図14 11~12層出土石器実測図(1) (縮尺 2/3)

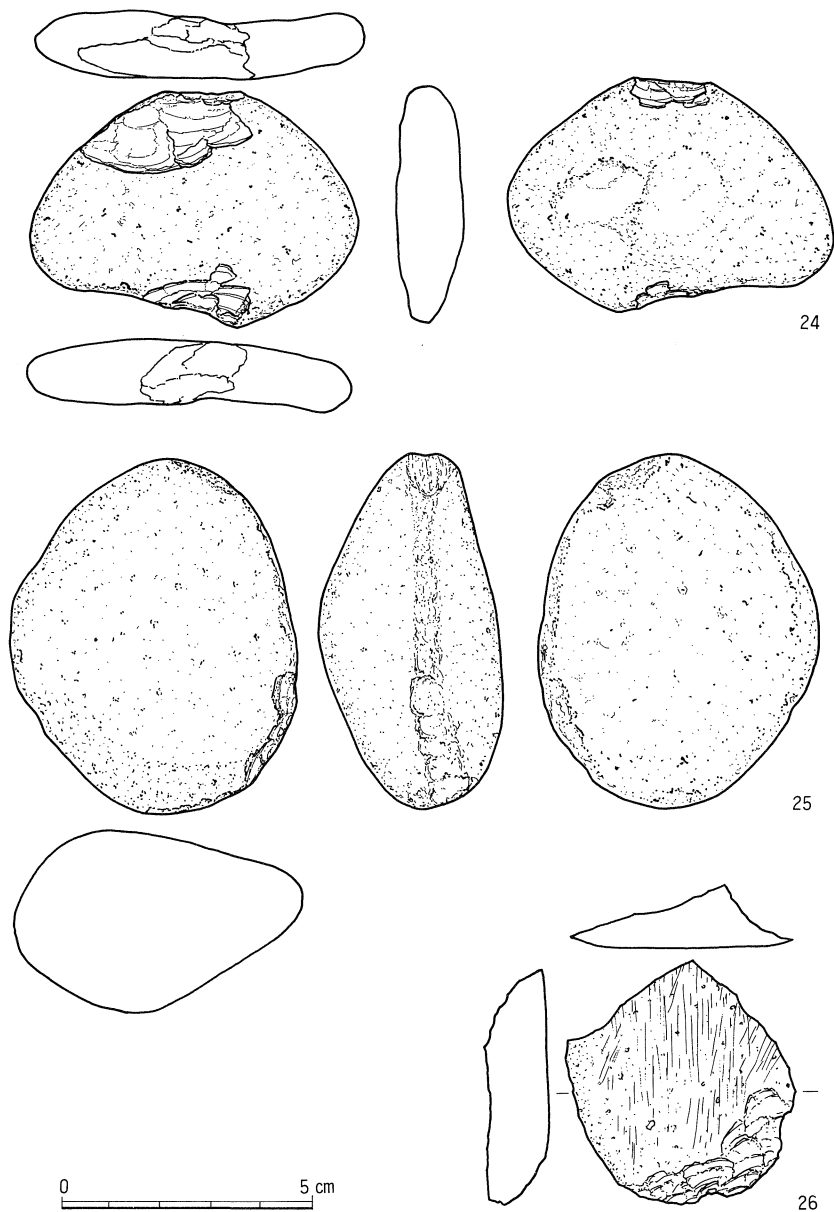


遺物番号	出土地点	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	a-3	石鏃	サヌカイト	(18)	14	3	0.8	先端部に衝撃剝離痕あり
2	a-3	石鏃未製品	サヌカイト	20	19	2	0.7	先端部作りだし
3	d-2	石鏃未製品	サヌカイト	24.5	16	4	1.4	剥片の周縁を調整し先端・基部は調整が不十分
4	a-2, 3	石鏃	サヌカイト	(18)	22	3	1.0	先端部に衝撃剝離痕あり
5	11層一括	石鏃	サヌカイト	(31)	(21)	4	1.4	脚部欠損
6	a-2	石鏃未製品	サヌカイト	38	(22)	4	2.9	平坦部剝離により先端部作出
7	b-3	搔器	サヌカイト	(34)	29	6	5.2	剥片の縁辺を刃部として片面に顕著な摩滅痕あり
8	b-3	楔形石器	サヌカイト	33	28	11	8.4	両側縁に剪断面あり
9	11層一括	楔形石器	サヌカイト	23	18	5	2.9	
10	11層一括	楔形石器	サヌカイト	29	26	9	7.7	周縁に2箇所切断面打面あり
11	a-2, 3	剥片	サヌカイト	36	30	7	6.0	両極打法により剝離され、腹面に加工痕あり
12	a-3	剥片	サヌカイト	34	25	8.5	7.3	剪断面あり、周囲に調整痕あり
13	a-3	剥片	サヌカイト	20	10	2.5	0.4	
14	b-3	剥片	サヌカイト	23	17	4	1.1	折れ面あり
15	b-3	刃部再生剥片	サヌカイト	21	32	4.5	2.5	石鏃の刃部再生剥片
16	a-3	剥片	サヌカイト	17	12	4	0.2	剪断面あり
17	b-3	剥片	サヌカイト	18	24	5	2.3	折れ面あり
18	a-2	剥片	サヌカイト	(24)	21	3	2.2	〃
19	a-2	剥片	サヌカイト	23	31	5	4.1	〃
20	a-2, 3	剥片	サヌカイト	11	25	4	1.6	〃
21	a-2	剥片	サヌカイト	18	26	4	2.1	〃
22	a-2	剥片	サヌカイト	23	29	3.5	2.8	〃
23	12層上面	剥片	サヌカイト	(43)	(27)	9	7.2	縁辺に顕著な摩滅痕あり

図15 11～12層出土石器実測図(2) (縮尺 2/3)

## 11・12層出土遺物 (図14～16、図版二・三)

11層と12層上面からは、図示し得ないほどの細片の縄文土器の他に、比較的豊富な石器の出土があった。1～6は石鏃とその未製品と考えられるものである。1・4・5は挟りが明確に作



遺物番号	出土地点	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
24	11層一括	石錘	凝灰岩	63	87	18	129.8	
25	11層一括	磨石	凝灰岩	94	76	51	495.5	
26	b-3	磨石		(48)	(45)	(14)	26.5	下端に敲打痕あり

図16 11～12層出土石器実測図(3) (縮尺 2/3)



り出されており、石鏃の完成品である。1・4は先端部が破損しているが、先端部からの衝撃剥離を残す。1・3は先端部を作り出しているが基部の作出がみられない。6は剥片の周縁に交互剥離を行い尖頭形に形態を修正している。基部にあたる部分には調整がみられない。

7は横長の剥片の縁辺を刃部とした搔器である。器体の中央から破損している。刃部の片面は顕著に磨耗している。8～10・23は剥片を素材として上下端から加撃した痕跡を残す。いわゆる楔形石器と呼称されるものである。いずれも側縁が折損しており、打瘤の位置から上下からの加撃によるものが多い。11・12は両極打法により剥離された剥片である。

12～23は折損部をもつ剥片である。主要剥離面の打瘤を残すもの(13～15・17)と、それらも残存しないものがある。なかには17・18・20・22など、剥片剥離後の折損面が二辺以上からなるものもあり、しかもこれらが出土した剥片の大半に認められる事実には柱目すべきであろう。

24は石錘である。偏平な自然礫の短軸に表裏から紐掛けのための調整剥離を施す。25は磨石である。自然礫の周縁を機能面としている。器体の厚みは一定せず、側端部のみを利用している。26も磨石であるが、こちらは偏平な礫表面を機能面としており、擦痕が観察できる。また、下端部には打痕が観察され、敲石としての機能をもっていたのかもしれない。(阿部)

### 3. 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構には、10・11層上面で検出された水田畦畔と、11層上面の水田に伴う池状窪地遺構がある。以下に層ごとに概要を記述する。

#### 11層上面検出遺構 (図17)

11層上面では水田畦畔・池状の窪地が検出された。

**水田畦畔** 検出レベルは2.3～2.0mである。畦畔は明瞭に検出された部分とそうでない部分がある。特に調査区の北側では11層(黒色土)上面の盛り上がりが見事に明瞭に検出された部分と全く検出されない部分の差が大きかった。検出されなかった部分は上の水田耕作の際に削平されているのか、あるいは本来畦畔が存在していなかったと考えられる。畦畔は東西方向と南北方向に作っており、ほぼ等高線に平行あるいは直行している。主要畦畔の判定は難しいが、東西方向の畦畔よりも南北方向の畦畔の方が直線的に連続して作られているようである。畦畔の高さは断面からみる限り5cm程度である。1区画の平均的な規模は1辺2～2.5m程で、面積は5.5mと小さな区画であるが、検出できた部分が少ないため、この数値が水田全体の規模を反映しているかどうかは不明である。しかし、津島岡大遺跡でこれまで検出した水田はこの程度の小区画のものが主体のため、当遺跡内では一般的な規模であると考えられる。

旧地形は調査区の南東から北西に向かって緩やかに傾斜しており、最大高低差は40cm程度である。調査区の北側は低湿地になっていると考えられており、水田域は北側にはあまり広がらな

いと考えられる。

**池状の窪地** 調査区を中心付近の標高の低い部分で不定形の比較的大きな落ち込みが検出された。深さは11cm程度でそれほど深いものではない。掘り込み面が11層上面であることや畦畔がこの窪地の直前で終わっていることなどから、水田に伴うものと考えられる。埋土が水成堆積

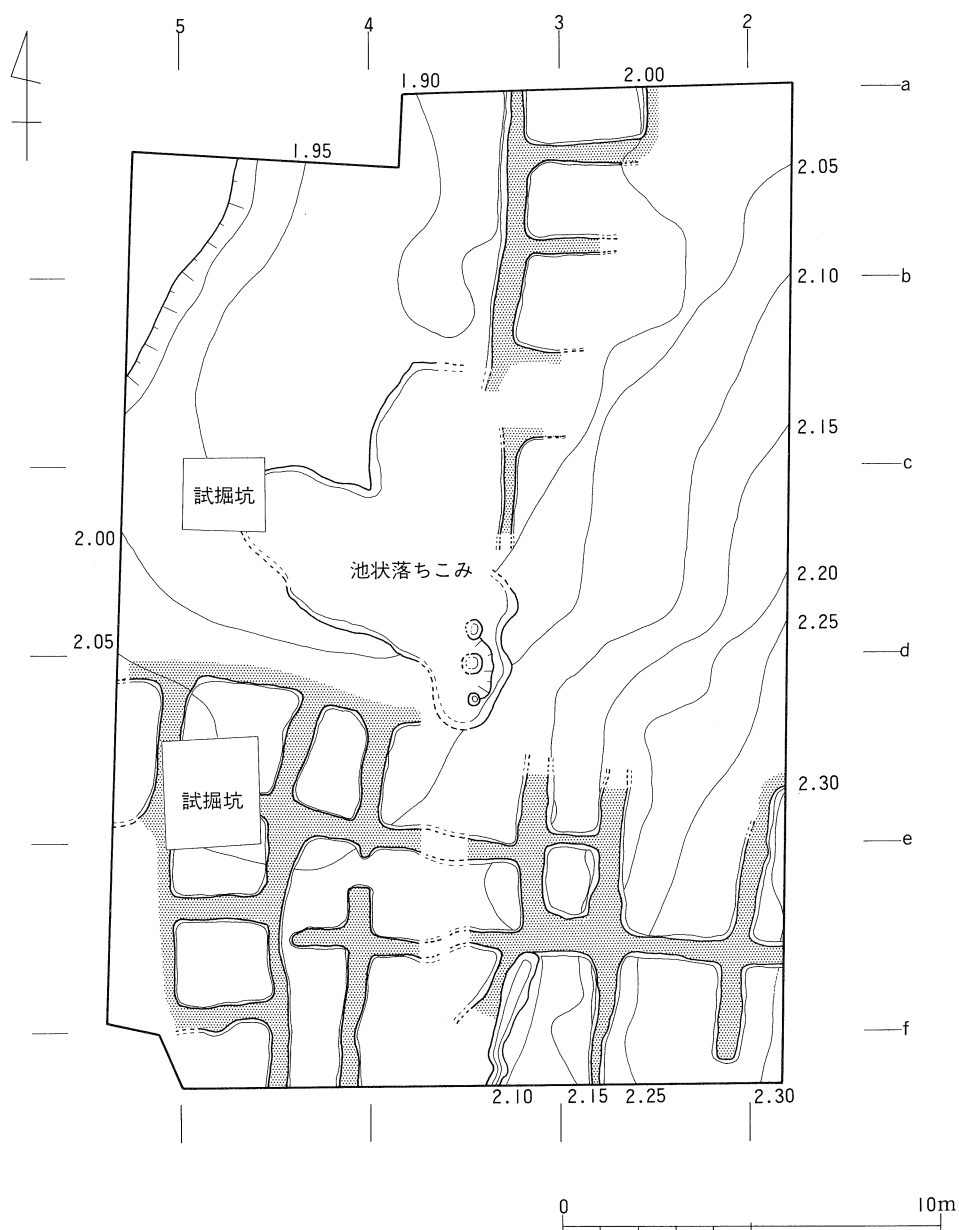


図17 11層上面水田実測図（縮尺 1/200）等高線は標高（m）

物であることから、常時水が溜まっていたと考えられ、ため池のような機能を推定できるが、平面形が不安定であることやあまり深くないことから、積極的に地面を掘り込んで作ったものではなく、自然の微地形を利用して形成したものと考えられる。落ち込みの南の部分で底面から掘り込んだピットを検出したが、機能は明らかでない。

また、調査区の北西部で段が形成されているのが認められた。5 cm程の段であるが、北東～南西方向に地面をカットするように段を形成している。調査区にかかった部分が少なく、人為的なものという確証もないが、自然地形としては不自然であり、水田の形成に際した地形の改変の可能性はある。

**出土遺物** 出土した遺物は僅かであり、混入と考えられる縄文土器の細片とわずかな弥生土器の破片が出土し、これらは細片を含めて大半は弥生時代前期のものであった。1は壺の口縁部である。口縁端部が幾分肥厚しており、全体に風化がはげしい。2は壺の肩部である数条が単位になる横位の沈線が周回するものであろう。

水田の形成時期については、出土遺物が少ないため判断が難しいが、直上の10層中から弥生時代前期・中期後半の土器が出土していることから、これによる限り弥生中期には11層水田は埋まっていたものと考えられる。従って、津島岡大遺跡におけるこれまでの調査の結果も併せて、所属時期は弥生時代前期後半に

求められる。

(富樫)

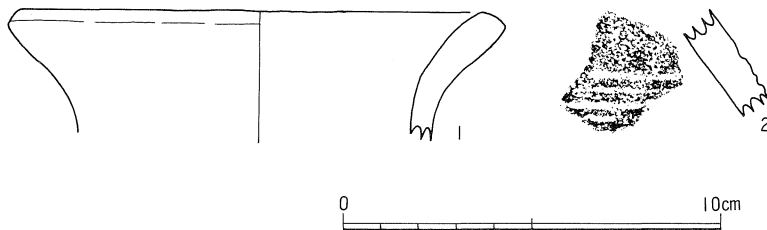


図18 11層出土土器実測図 (縮尺 1/2)

遺物番号	出土地点	器種	部位	口径・底径	文様・調の特徴	色調	備考
1	11層一括	壺	口縁部	67	風化顕著	黄灰褐	
2	11層一括	壺	胴部	—	横走する4条の沈線	黄灰褐	

#### 10層上面検出遺構 (図19・20)

10層上面では調査区全域で水田畦畔が検出された。上面を薄く砂が覆っており、比較的明瞭に検出された。

**水田畦畔** 検出レベルは2.35～2.1mである。1区画の面積は、推定復元値を含め測定可能なもののうちでは24.6～5.3㎡、平均で10.3㎡であるが、10㎡未満のものが多い。平面形は南北方向4～5 m、東西方向2 m程度の長方形のものが多い。畦畔は南北方向と東西方向に作られており、それぞれ等高線に平行する南北方向の畦畔は直線的に連続するものが多いことから、これが主要畦畔と思われる。

旧地形は調査区の南東から西に向かって緩やかに傾斜している。調査区内での高低差は2.5cm程で土層の堆積が進んだため、11層上面よりも傾斜が緩やかになっている。

出土遺物は多くない。図20—3に示したような弥生時代前期の土器が最も多いが、中期末の土器が若干出土していること、11層上面の水田の上で検出したことなどから弥生時代中期末の

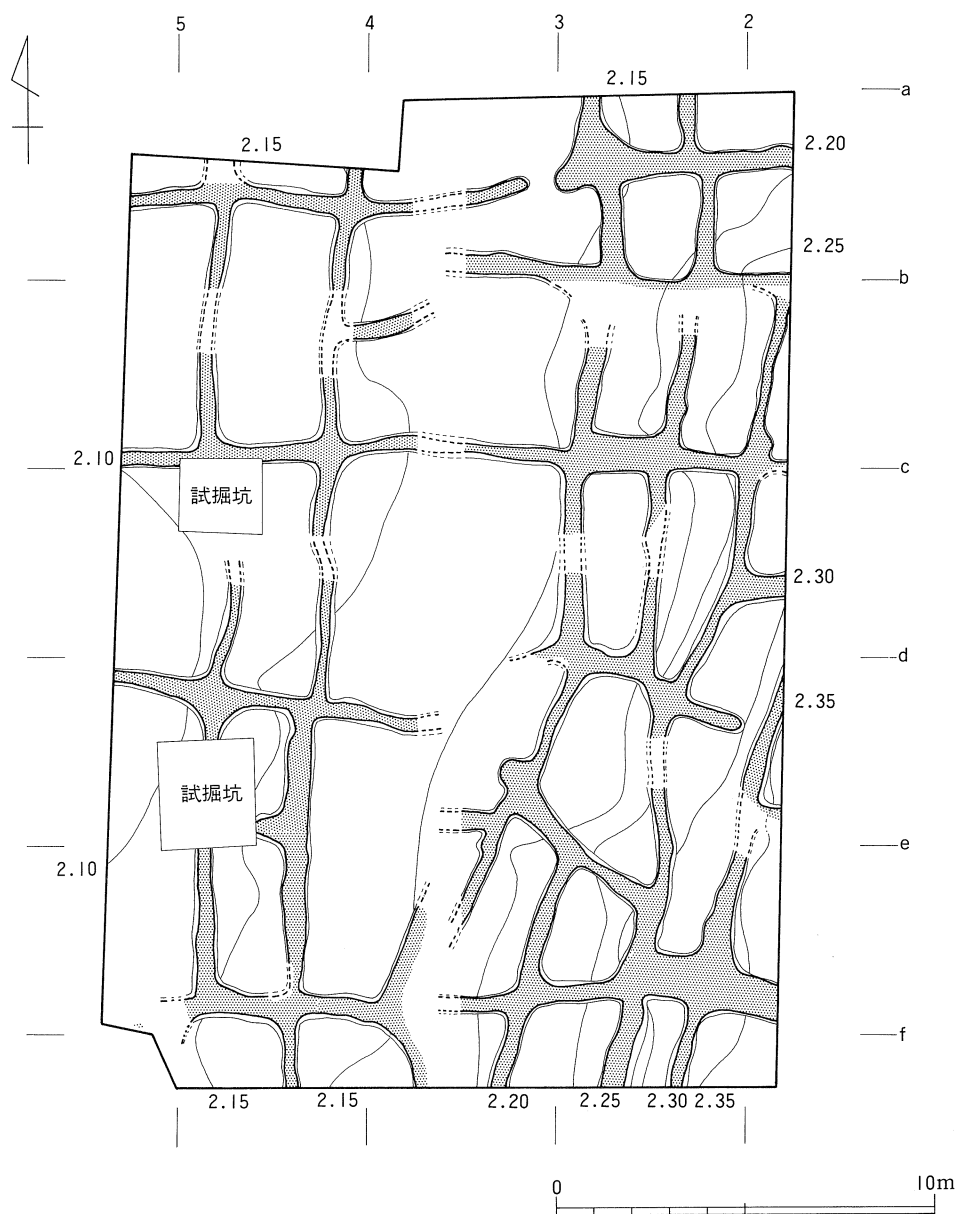
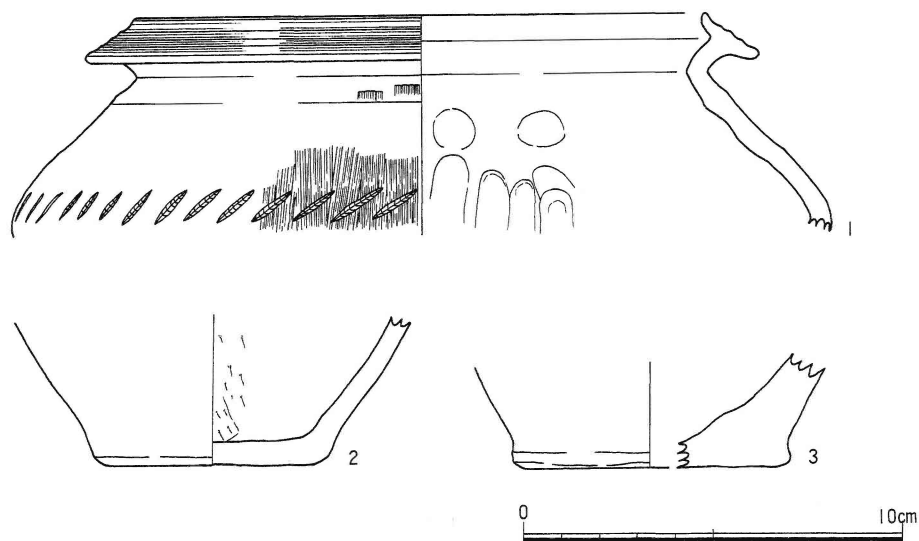


図19 10層上面水田実測図 (縮尺 1/200) 等高線は標高 (m)

可能性が高いであろう。

今回検出された水田はともに弥生時代のもので、両者に大きな違いは認められない。今回の調査区は津島岡大遺跡の中で北端付近に位置し、これより北側では黒色土やその上の層が粘土化している状況が認められたことから低湿地になっていたと考えられる。したがって、今回検出した水田は付近の水田域の北端ということが出来る。検出畦畔の形成は地形を利用した方法をとっており、等高線に平行した御向に主要畦畔を作り、その間を区切って水田を形成している。明瞭な水口は少ないが、畦畔の高さが5 cm程度であることから、土地の傾斜を利用して畦畔をオーバーフローさせる方法が考えられる。(富樫)



遺物番号	出土地点	器種	部位	口径・底径	文様・調整の特徴	色調	備考
1	10層一括	壺	口縁部	(150)	口縁部凹線 外面刷毛 刺突	淡茶灰色	
2	10層一括	壺	底部	(54)	外面ナデ 内面タテケズリ	黄灰褐	
3	10層一括	壺	底部	(70)	外面 ヘラ削り 内面ナデ	暗黄褐	

図20 10層出土土器実測図 (縮尺 1/2)

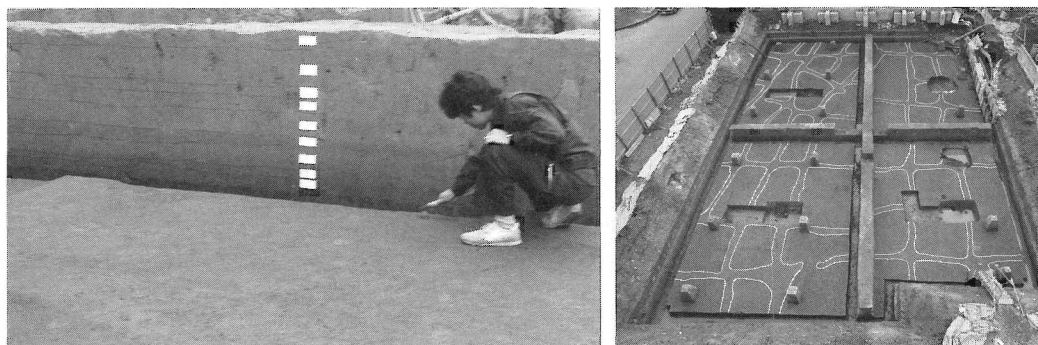


写真4 10層上面水田調査状況 左：水田精査状況 右：10層上面水田（北より）

#### 4. 近世の遺構と遺物

2層上面では鋤痕は南北方向に不規則に残っている(図21)。SD 1は調査区の中央やや西寄りを南北方向に延びている。確認できる掘り込み面のレベルは3.0mである。中には礫の間は黒灰色粘質土・青灰色粘質土が充填している。礫が詰め込まれていることから、畑の水抜きといった機能が考えられる。図22に示したように掘り込みが確認できるのは3層からであるが、本来

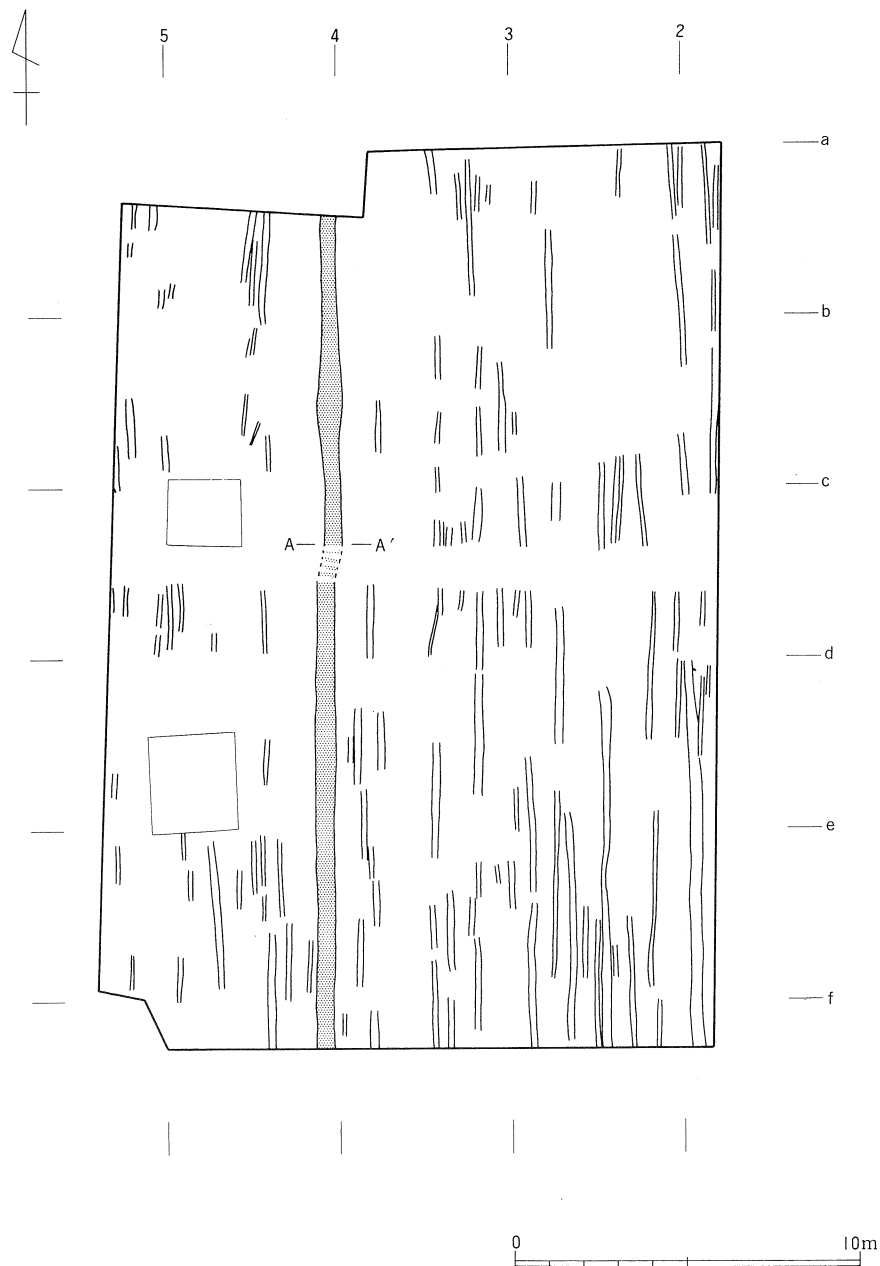
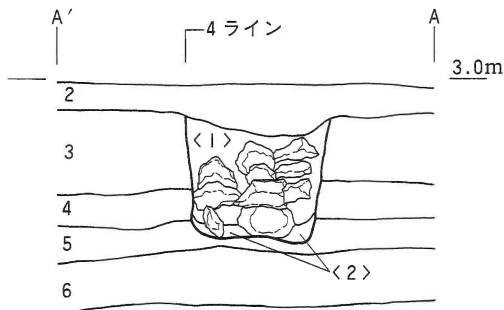


図23 3層上面検出遺構実測図 (縮尺 1/200)



<1> 黒灰色粘質土  
 <2> 青灰色粘質土 (Fe多)  
 \* 2～6層は基本土層

図22 SD-1断面実測図 (縮尺 1/40)

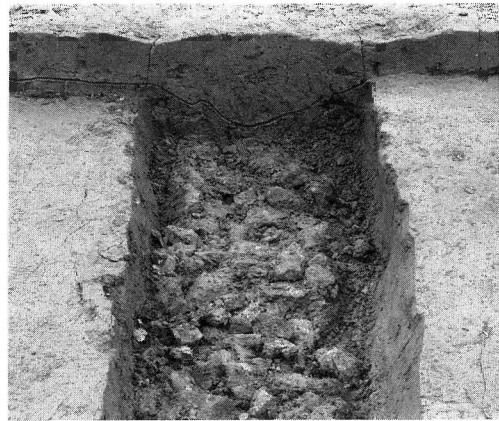


写真5 暗渠 (SD-1) 断面

は2層上面から掘り込んだもので2層上面に形成された畑の耕作で上部が失われたと考えられる。このようなことからSD 1は2層上面の畑に伴うもので、畑の水抜き用の暗渠と考えられる。

出土遺物は僅少であるが、SD 1から図に示した備前焼の破片が出土している。室町時代以降のものと考えられる。(富樫)

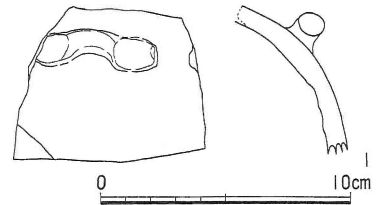


図23 SD-1 出土土器実測図

遺物番号	出土地点	器種	部位	口径・底径	文様・調の特徴	色調	備考
1	S I-1	備前焼 壺	肩部	—	内外面ヨコナデ 把手部押圧	暗赤褐色	

## 第4章 調査の成果と課題

### 縄文後期のサヌカイト製石器群にみられる剥離面構成と技術

#### はじめに

今回の調査では、11層とした黒色土中および調査区北半に限定的に堆積する11b層を中心としてサヌカイト製の石器と剥片が出土した。出土資料の数は決して多くはないが、それらの出土状態はa-3グリッドを中心として、その周囲に分布の集中域を形成するという点でひとつのまとまりを示し、石器製作をともなう活動がこの地点を中心にして展開された可能性が指摘できた。

遺物の分布は調査区の北方に延び、石器群の広がりも完結したものとはいえないため、その全体像をつかむには資料的な制約があるのは否めない。しかし、そこから出土した石器群のなかには、整理分析の過程で今後の当該期石器群の研究を展望する意味においても、看過できないいくつかの重要な問題をもつ資料の存在を確認できた。具体的には石器として完成された製品よりも、むしろ縄文時代の石器研究において、従来より軽視されがちな剥片類の特徴、とくに剥片にみられる剥離面の構成と、その成り立ちについて石器製作とのかかわりから観察するとき、素材と製品とを結びつける製作工程として図式化される従来の理解と、多少ことなる意義が今回の資料に内包される点を指摘し、これをもって今後の当該期石器群の理解の展望の一端としたい。

#### 1 資料の出土状態

調査によって出土した資料は全部で36点である。それらはa-3区を中心としている(図24)。この地点からは縄文時代後期前葉の土器が、やや集中して出土している点からサヌカイト製の石器群も、これと同じ時期と考えることができる。

なお、石器群が出土した11層と11b層は大型の土搔具により人力で掘り下げをおこない、石器群の出土が確認できた時点で、より慎重に掘り下げをおこなったが、土壌の水洗選別等によるサンプリングエラーの回収はおこなっていない。したがって、未回収遺物は相当な量に上ることが予測される。とくに石器製作作業の復元に有効な最終調整剥片やパウダー等の微細遺物は回収されていない点を明記しておかなければならない。

出土した石器群は石鏃とスクレイパーや楔形石器と称される器体の両極に打痕をもつ石器と、敲石および剥片類から構成されている。個々の器種などに分布の差異は認められず、むしろ、これらは一時期の活動にともない廃棄されたものと考えた方が良いかもしれない。本地点



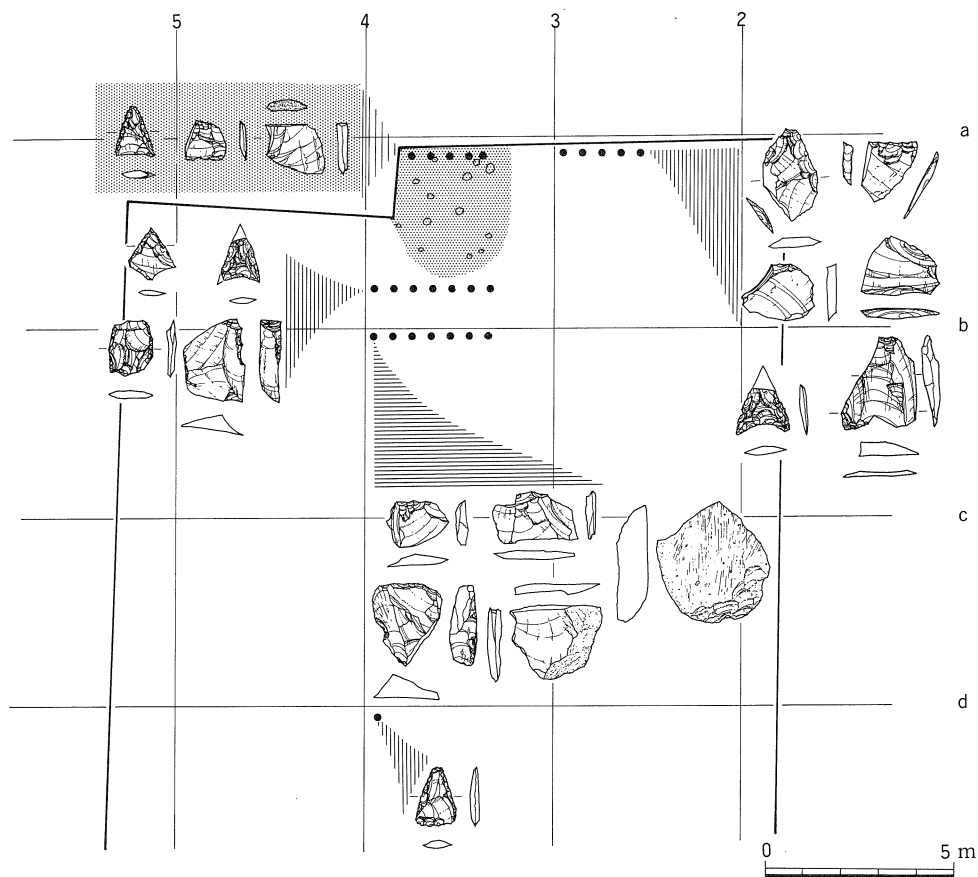


図24 石器の出土状態（トーンは石器集中部分）

での石器製作の有無については、微小遺物の回収がなされていないため、明確な根拠を示し得ないが、出土資料の中で明確な器種として認定できる石鏃と、その未製品と思われる資料が存在する点から、石鏃を中心とした石器製作が行われた可能性は指摘できる。

## 2 剥片の形状と剥離面の構成

1枚の剥片には石器製作における異なるふたつの痕跡が共存している。1つはそれが打ち剥がされる以前の状態の一部が背面の剥離面の構成として、そして2つ目にはその剥片の平面形や厚み、撓りの主要因としての打瘤と剥離痕が腹面に残されている。また、打ち剥がされた剥片の、その後の刃付けや加工痕としての剥離面がこれに重なるから、一枚の剥片に残される石器製作行為は単純ではなく、石器製作の作業の詳細を明らかにする過程はこれを読み解くことに始まる。

対象物（母岩または石器）を加撃して、そこから打ち剥がされる石片を剥片と定義した場合、本遺跡から出土した資料には、あきらかにその後に手の加えられたものが圧倒的に多い。それらが刃部の細部加工などであるならば、石器作りの仕上げの二次的な作業として理解できる。しかし多くの出土資料は利器への加工ではなく、剥片の折損である点が大きく異なる<sup>1)</sup>。実際に剥片の折れを意図的な行為としての切断または分割と認識するか、作業中のアクシデントと解するかは意見の分かれるところであろう。しかし、それらが偶然とは思われない頻度と、そこにある意図の存在を示唆するのであれば、それは石器製作技術の枠組のなかで正しく位置づけるべき遺物の特質であろう。

#### (1) 剥離面の構成と剥片の分類

剥片として扱ったもののなかで、いくつかに分類し得た各群の特徴について整理する。剥片のなかで、主要剥離面の方向は肉眼による観察による限り、その多くは節理に平行していた。完全な形を留めた剥片の分類よりも、折損品の多い事実の背景の推測を含め、ここでの分類は、打剥の方法や技術による剥片の形状よりも、その後の行為による形状変化を含めた分類を試みた。

- a 類：剥片の形状に関係なく、基本的に打面とそれによって打ち剥がされた剥片の縁辺が残存するもの
- b 類：打面が残存し、剥片の縁辺部にほぼ垂直に折れたような面か、またはこの部分がヒンジフラクチャーを形成するもの（図25-1）
- c 類：剥片の二辺以上に器体に対して垂直方向に加撃された折損面を残すもの、打点の残るものと残存しないものがある（図25-2・7）

出土した剥片における剥離面の構成から、以上のように大別できる。このなかで、a類は非常に少ない。またb類も2点と少なく、碎片を除いた大半は、さらに細かく分類できる可能性を残しつつも、c類にまとめられるものが圧倒的である。

打剥の状態を想定しながら、これらの資料をややくわしく観察するならば、b類は折れ面と区別が難しいものもある。しかし、なかには急角度のヒンジで加撃が屈折しながら抜けて、剥片の縁辺にわずかなフェザーが付着したように残存するものがある。またサヌカイト製の大型剥片や石鉄などの器体には、打剥による衝撃が末端で抜けきれずに、剥片が折れた痕跡が階段状に観察できる場合がある<sup>2)</sup>。こうした痕跡は打ち剥がされた剥片の縁辺に折れ面を形成するであろう。

図25-1はそうした特徴をもちつつ、ねじ折れたような形状を示す。そしてこの特徴はヒンジまたは折面は原則として打点の延長上に位置することになる。

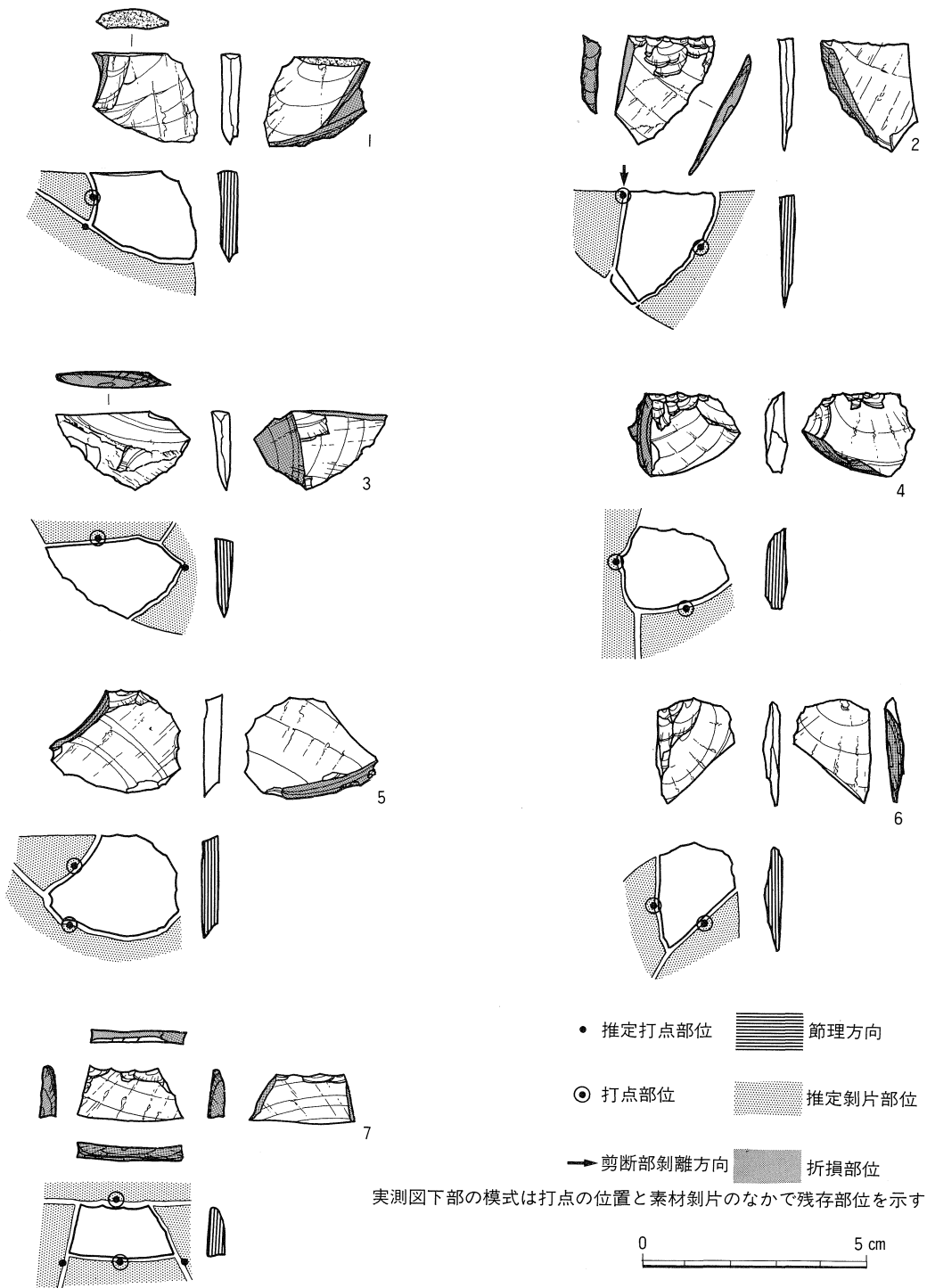


図25 剥片にみられる折損部と打点の位置関係

c類は多様な剥片がもとの形状として復元されるが、総じて大型で厚みの均質な剥片である場合が多く、剥片の縁辺の二辺以上に折れ面が位置する<sup>3)</sup>。出土した剥片は3cm前後の大きさであり、そのことからすると至近の位置に複数の折れ面が存在することになる。いずれにしても複数回にわたりかなり小さく剥片が折れた、または分割したことを示唆するであろう。

## (2) 剥片の形状と剥離面の性質

本遺跡における石器製作の作業工程のうえで注意されるのは、剥片c類の生成の背景であろう。剥片b類のそれが多くの場合、打剥のアクシデントに主要因をもつものに対して、剥片c類のそれは器体に垂直方向の複数の加撃が総じて小さい剥片に観られる点で不自然である。

本遺跡出土のサヌカイトは節理の発達した特徴をもち、またその搬入形態が板状の大型剥片であったと推測されている(絹川1992、富樫1993)。また剥片剥離はこの節理を用いて水平に大型の剥片を打ち剥ぐ技術が想定されている(竹広1988)。出土した多くの剥片に見られる折れ面は、節理に垂直方向に加撃されることにより偏平な剥片を分割する作業として石器製作の技術的特性と捉えることができないだろうか。

図25-2～7に示した剥片は、いずれも二辺あるいはそれ以上の折損面が切り合いをもっていている。剥片の厚みは3～5mm前後の殆ど湾曲のない偏平な剥片で、節理は剥離面に平行な位置関係にある。これらの特徴から、本来は板状の素材の節理に沿って打ち剥がされた比較的大型の剥片ではなかったかと思われる。各資料から推測されるのは、一枚の剥片がかなりの回数にわたり分割されたということである。

今回の調査では全体の出土数自体が少ないので、石器作りの工程でどれくらいの割合で、こうした剥片の分割が行われたのかは不明であるが、厚さが5mm前後か、それ以上で平坦な剥離面を留める剥片のかなりのものが、小型石器の素材提供のために分割の対象になったものと推測しておきたい<sup>4)</sup>。それでは、小さく分割された剥片はいかなる技術により製品へと仕上げられたのであろうか。

## 3 楔形石器と石鏃－石器製作工程の連関から－

### (1) 津島岡大遺跡の『楔形石器』

今回の調査を含めて、中部瀬戸内地域の縄文後期以降の石器群の主要な器種として、いわゆる楔形石器の安定的な存在が認められる。その機能については骨や木材などの分割や剥片石器の素材を供給する石核とする考えがある<sup>5)</sup>。

楔形石器は、素材の両極から加撃された剥離痕が、器体の表裏面に特徴的に認められる。その機能については過去における津島岡大遺跡の調査研究のなかでも幾度か検討されてきたこと

であった。

栄 一郎は津島岡大遺跡第2次調査の縄文晩期のサヌカイト製石器群を分析し、楔形石器の剥離面に石鏃の素材に見合う剥離面が僅かながら認められることと、他に石核が見当たらない事実から、石核の可能性を強調した(栄1986)。

絹川一徳は津島岡大遺跡第3次調査の後晩期石器群の分析から、当該期の石材の供給体制の不安定な状況下での「より小型の剥片を量産する方法として」「楔形石器の採用による各種形状の剥片素材の獲得という意図」を認めている(絹川1992)。

つづいて現段階で最も豊富な縄文後期の石器群を出土した津島岡大遺跡第5次調査で、富樫孝志は、楔形石器の大きさと剥離面に注目し、明らかに石鏃よりも小さい楔形石器の存在を指摘し、これらについては骨などの分割に用いるクサビとしての機能を推定し、楔形石器のなかに石核とクサビの両者が存在することを指摘した(富樫1994)。

津島岡大遺跡を含め、他の地域の遺跡を瞥見してみても、石鏃の多い遺跡には楔形石器が同様に豊富に存在する例が圧倒的に多い。しかし、これとは逆に楔形石器のみが大量に出土する遺跡は、縄文時代の遺跡では管見にはない<sup>9)</sup>。したがってクサビとしての機能を類推する場合、石鏃などの狩猟具の卓越する石器組成と、動物骨の解体加工作業の複合を類推するしかないが、それでは木材などの加工具としてのクサビの活用場面は推測不能ということになる。

このことは楔形石器がクサビか石核かという択一的な分類基準に準ずるよりも、検討の視野を広げて両極打法の痕跡から認定された資料の詳細を、サヌカイト製の石器と剥片類の総体を関係づける、石器製作の体系の中で理解する必要があることを示唆するのではないだろうか。

## (2) 楔形石器の剥離面構成

津島岡大遺跡から出土した楔形石器のなかで特徴的に認められるのは、作業面端部に観られる削片の剥離痕の存在である。しかも小型の楔形石器は、多くの場合この剥離面は器体に残された剥離面の最も新しいものである。つまりこの部分の剥離を最後に廃棄されるものが多かったという事実である。

今回の出土資料においてもその傾向に変わりはない。図26は小型の両極打法による剥離痕を残すいわゆる楔形石器である。他の地点より出土した資料を観ても、これらは明らかにある一定の形状の剥片素材を提供し得るような剥離痕がない。つまり石核ではない点が明らかである。しかし石核としての理解の対案として従来から指摘されるクサビであるならば、側端部の削片の剥離を最後に廃棄されることの十分な理由は見当たらない。

上下からの加撃による器体の縦截は、見方をかえれば器体自体の部分的な破損を意味する。それらは目的の形を整えたまたは整える中途の段階での側端部の剥離である点から、何らかの

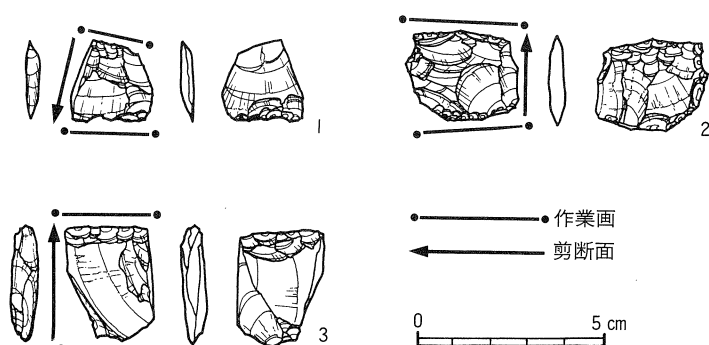


図26 小型剥片にみられる両極打法の痕跡

目的に応じて調整された石器の破損品ということになる。

ところで、小型の石鏃またはその未製品のなかには側縁が直線的に揃い、この部分に細かな剥離痕が不規則な切り合いをもって配列されるものがある(図28-3・4)。また楔形石器と分類された資料のなかには、当初から小型の剥

片を素材として、器体の上下端に細かな両極打法による剥離痕が残されているものがある(図26)。このことは、楔形石器が必ずしも作業の進行とともに小さくなるのではないものを含むことを示している。

図26-2は器体が両極打法により剥離され、かなり薄手に仕上げられたものである。周辺から出土した製品の存在から考えても、石鏃の未製品と考えられる。こうした資料の存在をふまえて、観点を改めて、側端に最新の剥離痕を残す小型の楔形石器は、本来製作の途上の小型石器の未製品段階での欠損品が含まれると考えることはできないだろうか。これらの検討をもとにするとある程度の厚さと大きさをもつ剥片を素材にして、両極打法により器体の厚さと形状を修正した加工素材の周縁に、仕上げの加工を施して製品に作りあげるとい工程が存在する可能性が高い。剥片剥離の進行した楔形石器の打面は平坦面を残さず、線状の陵を打面としている点も、石鏃の縁辺の仕上げ加工部を用意したものと考えられよう。

本地点では薄手の器体の楔形石器のほかに、厚手の剥片を素材としたものがある(図27)。1は上端と下端に素材の切断面が残存し、ここを打点とした細かな剥離痕が残されているほかにも周縁部からの加撃が加えられている。右側縁部には剪断面があるが、後の加撃痕がこれを切

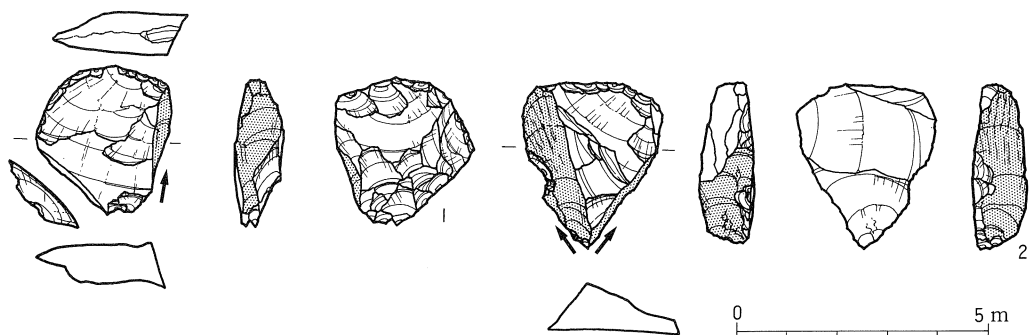


図27 楔形石器の剪断面 トーンの部分は剪断面を示す

るので、器体の周縁を移動しながら、ほぼ連続的な加撃が繰り返されたものと考えられる。2は左右側縁に剪断面が残されるが、剪断方向が交差し下端が尖頭状になる。こうした形態は打点が一定の部位に固定されているのではなく、器体の周辺を移動しながらの加撃がおこなわれたことを予測させる。

これらの楔形石器は切断した剥片を素材として、その周縁を打点としており、必ずしも対向する部位に固定的な打面を用意しないらしい。そこから剥離される剥片は小さく、また平坦な作業面が残されないという特徴がある。石核としての機能には否定的であるとともに、素材の厚さを減じるために両極打法が行われた可能性が指摘できる。

### (3) 石鏃の剥離面構成と素材

石鏃の器体にみられる剥離面には素材の形状を知る手掛かりとなる素材面が残存するものがある。縄文後期に限らず、当地域のサヌカイト製石鏃にそうした特徴が指摘できる事実は少なからず注目する必要がある<sup>7)</sup>。また、現在の段階で明確に石鏃の未製品と想定できる資料が、薄手の剥片の縁辺に簡単なトリミングを施したもの以外、非常に少ない事実は、出土した石鏃の特徴からみた場合、不自然である。両面加工か、あるいは素材のかなり中心部まで剥離を行い、器体の厚みを修正する段階がなければ、大半の完成品の製作工程を説明することができないからである。

本地点から出土した石鏃とその未製品の調整部分と素材面を図示した(図28)。ここには少なくとも大きく2つの工程の異なる仕上げ方法が指摘できる。石鏃の鏃身が2～3cm前後の小型のものは素材剥離面を残すものが多く、結果としてその面は平坦面が形成され、側縁部は交互剥離ではなく、直線状に切り合いの不規則な剥離面が並ぶものが多い(図28上段)。これは両極打法による固い平坦な台上での剥離作業の結果であろう。一方、大型で鏃身の長い1点は、素材剥離面を残さない。つまり、かなり素材に変形が加わったことを示している。その未製品と想定されるもの(図28—7)は、比較的大型の剥片を素材の先端から鏃身の全体に交互剥離による形状の修正を加えている。この交互剥離の加工部は打点の連続的な移動のため側縁が波状に残されている。この作業に進行によって、細身で厚手の器体をもつ大型の石鏃の製作が可能になるとと思われる(図28下段)。

主体的な存在である小型の石鏃は、その製作に薄手の剥片を両極打法により形状を修正する段階と、先端や基部などの細部を仕上げる大別して2つの工程が存在する。本遺跡の石器群の理解において最も問題な点は、素材調整段階での両極打法の存在と、高率で認められる剥片の分割であろう。

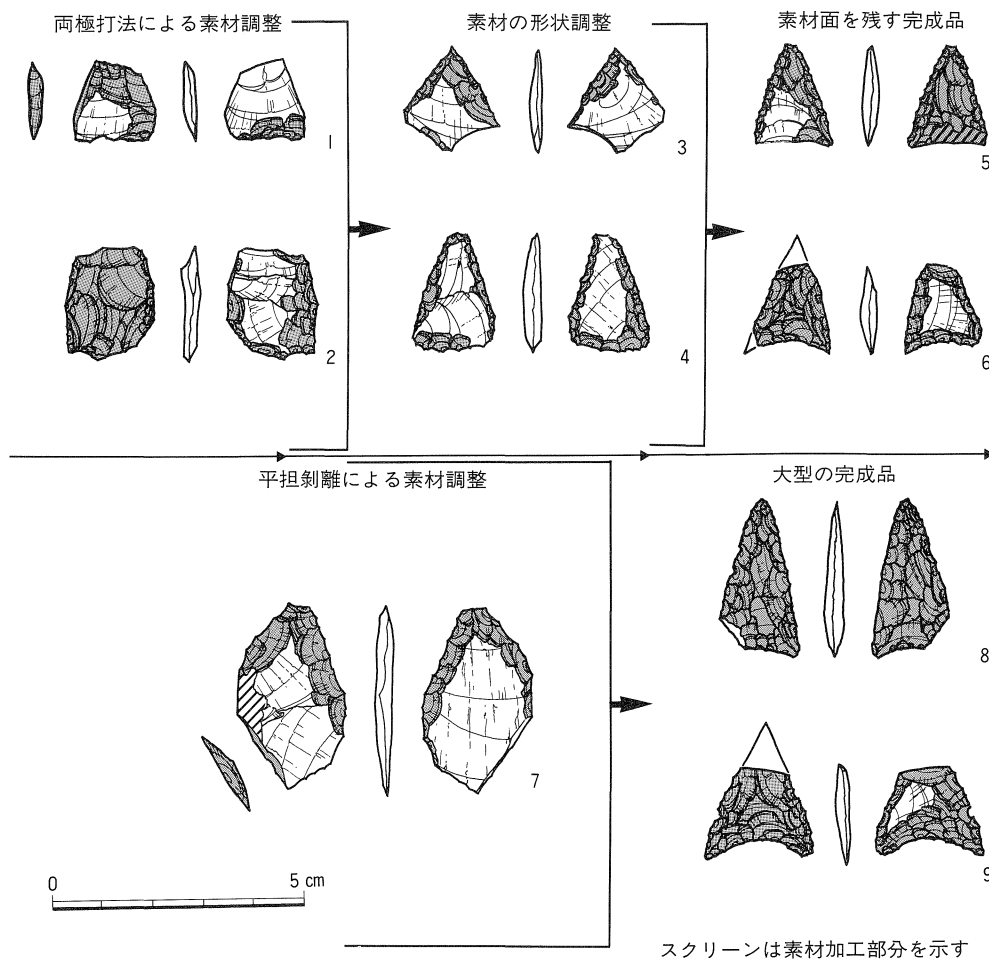


図28 石鏃の製作工程にみる素材と加工技術

#### 4 剥片分割と両極打法の組織的展開と石器製作

津島岡大遺跡第11次調査で検出された縄文時代後期前葉の剥片石器群は、サヌカイトを素材としており、他の石材を全く混じえない。この事実はすでに指摘されているように、香川県産の石材の安定的な搬入形態が確立していたことを示す（絹川1992、富樫1994）。

出土した剥片は、かなり高い率で器体が折損していた。これが単なる偶然の産物でないことは、剥離面の構成と、折損している剥片が偏平で大型であるらしい点から、それが特定の剥片を対象にして行われた剥片の分割である可能性が高いことを指摘した。遺跡に残された分割面をもつ剥片は総じて小さく、これらが二辺以上からなる分割面をもつ事実は、石器の作り手がかなり自由に、目的とした部分を分割していたことを示唆するであろう。

またそれらは、板状の原礫に水平に発達した節理に沿って、大型で厚みの一定した剥片を打



ち剥がす工程の後に、頻繁に剥片の分割が行われたことを推測させるものであった。この推測をもとにするならば、石器製作の時点では大型の剥片はかなり大量に津島岡大遺跡に存在したようである。しかしこれらが元の形状をとどめないのは、これを直接の素材として石器に加工したか、または分割してさらに小型の石器の素材とされたためである<sup>8)</sup>。

大型の板状の素材から節理に沿って剥離された剥片は大型で、偏平という特徴をもつ。したがって、打ち剥がされた剥片に付着した打面はかなり小さく、ここからさらに剥片を打ちとることは不可能な場合が多い。さらに目的に見合った小さい剥片を得ようとするためには、節理に直交する角度での打ち割りに因らざるを得ないのであろう。

資料に則して指摘できる二つ目の特徴は両極打法の多様性である。そしてこうした特性の把握から、石器作りの素材と製品とを結び付ける観点からの資料群の再検討が必要である点を指摘した。両極打法が特徴的に認められる石器としていわゆる楔形石器がある。しかし、楔形石器に機械的にクサビや石核といういくつかの機能を類推し、両極打法の痕跡をとどめる資料のすべてを択一的に理解するのは、少なくとも石器と製作技術の関係を体系的に関係づけるうえで片手落ちである。指摘したように、それらのなかには小型の両面加工石器の製作工程に位置づけられる資料と、その破損品が含まれている可能性が高い。楔形石器を単純に大きさから、クサビや石核と捉えるある種の含みのある位置づけのみでは、本来の個々の石器の特徴から具体的な活動を復元する作業までには、なお相当の距離を感じさせるのである。問題は両極打法が、素材と石器をいかなる関係で結びつけるかという点であり、この観点においてはじめてサヌカイトを素材とした石器群の総体を分析の対象とした論議が可能になる。

今回の調査で出土した石器群において指摘できたのは、両極打法の痕跡を留めるもののなかに石鏃などの剥片石器の素材調整段階のものが含まれるという事実であった。そして楔形石器の側端にのこる剥離面は両極打法による素材の調整加工段階の破損と考えられる。津島岡大遺跡におけるサヌカイト製石器の製作工程の上で、一律的にはないにせよ、かなり多くの場面で両極打法が用いられたことは確かな事実である。板状の大型素材から打ち取られた剥片は、石鏃などの小型石器の素材を提供するために分割され、両極打法による剥片剥離により素材が提供されることがあった。しかし、これが一個の石材から多くの器種を作り上げる石器製作の作業上の主目的であったかは、出土した製品をみる限り、なお論議の分かれるところであろう。石鏃や搔器と分類される大型石器のなかに、あきらかに両極打法により、薄手で石鏃の素材と成り得るような剥片が剥離された痕跡が観られるからである（図29）。

津島岡大遺跡でおこなわれた石器作りが、厚みの少ない大型で偏平な剥片を素材とする前提にたつならば、その初めの段階は意図に見合う平面形態への分割と、ほとんど垂直に近い角度の分割面の調整加工であったろう。幅の狭い分割面を計画的に剥片を打ち取るための打面とす

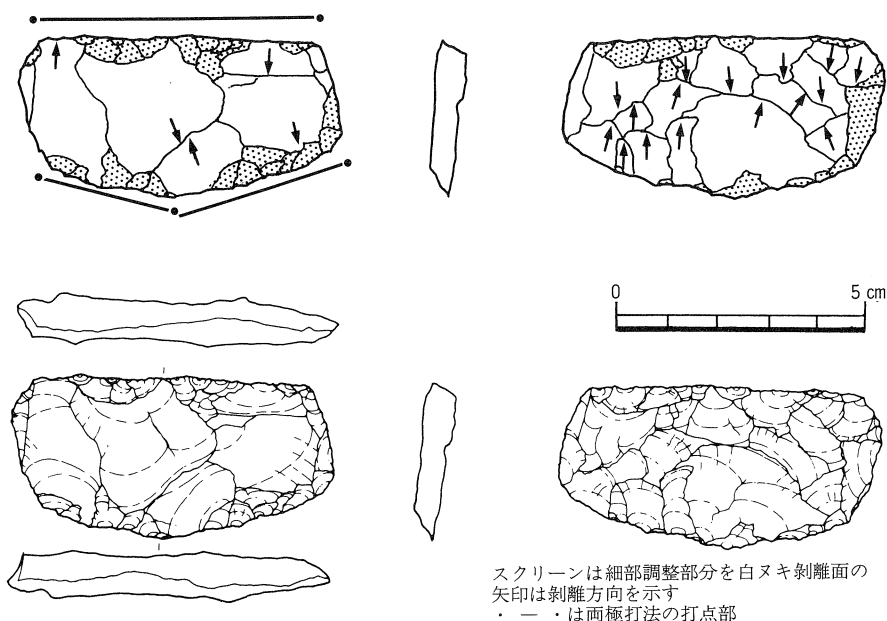


図29 大型剥片石器にみられる両極打法の痕跡（『津島岡大遺跡4』より）

るには相当な困難がともなうし、分割面の調整方法として効率的とはいえない。相対する分割面から加撃して、不規則ながらも素材の断面形と平面形の加工を可能とする方法として、両極打法が盛んに用いられ、石器作りの進行とともに各段階で削片が打ち剥がされ、また節理に直行する剪断面をもつ破損品を残したのだろう。

「楔形石器とその削片を多量に組成する石器群」という津島岡大遺跡の石器群の見かけ上の特色は、剥片の分割とそれを素材とした両面加工石器の生産を支える石材入手過程の成立と、効率的な石材利用形態の確立を、石器作りの痕跡として、表面的に反映したものではないだろうか。そこには剥片の平面的な形状修正としての剥片分割と、器体断面の調整技術としての両極打法が、場面を変えて繰り返し行われるという石器づくりの工程が想定され、両者の技法が安定的に展開される前提として、薄板状節理を特徴とする大型板状サヌカイトの存在意義が説明されると考える。今後は当該期石器群の器種とその加工技術を詳細に検討し、素材の特性と加工技術との関係性の検討から、サヌカイト製石器群の現象的特質を規定する構造と、その成り立ちを楔形石器の性格の検討<sup>9)</sup>をも含めて体系的に検討する必要がある。

本論の執筆に際して、富樫孝志、光石鳴巳両氏から助言を得た。とくに富樫氏からは学内出土の石器群について助言をいただき、本資料についても資料化と検討の機会を共にした。記して感謝の意を表したい。

（阿部）

# 註

- 1 縄文時代の剥片のなかに意図的な切断が存在したという指摘はすでに岡村道雄により行われている(岡村1983)。岡村は剥片の側端を打ち取り、縁辺を刃部とする利器の存在を指摘している。また鈴木俊成(1992)や山崎 丈(1994)は石鐮の素材などの剥片に折れ面が存在する点を指摘している。利器や石器製作に剥片の切断が行われたことを示唆する指摘として重要であろう。
- 2 こうした例は例えば、広島県洗谷貝塚の板状素材のなかにも確認できる(小都1976)。
- 3 もとの剥片の形状は残存部分で推測するしかないが、湾曲が少なく偏平で、背面と腹面が平行に近く、ほぼ厚みが一定しているものが多い。同様の剥片は津島岡大遺跡第5次調査でも多量に存在していることを確認した。
- 4 津島岡大遺跡第2次調査でサヌカイト製石器群を分析した栄 一郎は、剥片類の分析のなかで、石器の素材を推測するために完形の剥片の長幅比率を計測している。それによると完全なかたちの剥片は全体の40%前後で、それらの大きさは長幅が30—40mm前後の小さい剥片が主体である。大型の板状素材の剥離面は大型の剥片を連続的に打ち剥がす点に利点があるとするならば、これらの剥片の存在は素材提供のための剥片剥離作業のなかでは主体的とはいえないであろう。破損した剥片とされたなかには、かなり大型の剥片の破損品が存在する点からしても、意図的な分割がかなりの頻度で行われ、素材を提供していたことが推測できる。
- 5 岡村道雄は基本的に石核とする(岡村1983)。これに対して田中英司は石核と解釈している(田中1979)。共に実資料に則した分析を踏まえた結論であるが、しかし各遺跡毎での実態は両者の二者択一的な判断で捕捉できるほど単純ではないであろう。両極打法の技術的効用を多角的に検討し、残された剥片や石器との関係性の復元を通じて突き詰めてゆく必要があるだろう。
- 6 筆者の検討した東日本の遺跡である。検討した事例では楔形石器を出土した遺跡の石鐮や搔器類の石材は良く一致しており、排他的な関係は認められない点に注意する必要がある。その意味では津島岡大遺跡をはじめとした中部瀬戸内地域でも傾向は一致している。
- 7 津島岡大遺跡第2次調査では20—30%の石鐮に素材面が残されるという(栄1986)。
- 8 津島岡大遺跡のサヌカイト製石器の分析において、従来より石核の存在が不明確である点、楔形石器が安定的に存在する点から、残核をも対象とした徹底した石材の消費のあり方が指摘され、搬入石材の乏しい状況が推測されてきた(栄1986他)。しかし出土した剥片を見るかぎり、そこには板状の大型素材から剥離された剥片を別にして、ある種の石核から剥離されたと判断できる資料は稀少である。石器作りの当初から定型的な石核が存在しないか、きわめて少なかった事情を推測してみる余地がありそうである。
- 9 検討した資料中で、両側縁に最新の剪断面が位置し、作業面の一端が尖頭状を呈するものがある。また削片のなかに角柱状で極めて細い剪断面を残すものがあり、作業面に対する加撃方向と角度が平坦な剥片を打ち剥がすと考えるには合理的でないものがある。これらに対しては、クサビとしての機能を再考してみる余地がある。

# 参考・引用文献

- 岡田 博ほか 1985 『百間川沢田遺跡2』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59)
- 岡村道雄 1976 「ピエス・エスキューについて」『東北考古学の諸問題』
- 岡村道雄 1983 「ピエス・エスキュー、楔形石器」『縄文文化の研究』7
- 小都 隆 1976 『洗谷貝塚』福山市教育委員会
- 小野 昭 1986 「5 石器の生産」『岩波講座日本考古学』第3巻
- 絹川一徳 1992 「c 石製品」『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊
- 栄 一郎 1986 「石器類の分析」『岡山大学津島地区遺跡群の調査』II
- 鈴木俊成 1992 「縄文時代の石鐮について」『新潟考古』第3号
- 竹広文明 1988 「中国地方縄文時代の剥片石器—その組成・剥片剥離技術」『考古学研究』第35巻第1号
- 竹広文明 1993 「縄文時代の石器原材料獲得—金山産サヌカイトをめぐる一」『考古学論集』潮見浩先生退官記念論集

#### 第4章 調査の成果と課題

- 田中英司 1979 「縄文時代の剥片石器製作」『風早遺跡』
- 富樫孝志 1994 「津島岡大遺跡第5次調査出土の縄文時代後期石器群の技術構造」  
『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡調査報告第7冊
- 平井典子 1982 「第7節 石器」『百間川兼基遺跡1 百間川今谷遺跡1』（岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51）
- 山崎 丈 1994 「石鏃製作の諸問題」『神明山遺跡』
- 山中一郎 1978 「森の宮遺跡出土の石器について」『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告書』

## 総 括

今回の調査地点は津島岡大遺跡の北端に近い位置で、半田山を眼前に控える沖積平野に当たる。現在までの立会や試掘の成果から、本地点と山塊をはさむ北西側に湿地の広がることが推測されていたので、こうした湿地と沖積平野上の遺跡との関わりが調査の当初より注意された。津島岡大遺跡の過去における調査のなかで、何枚にも分層される厚く堆積した土層に関しては、その性状や出土遺物から大まかな時期が推測できるようになってきたが、今回の調査は出土遺物も少ない状況のなかで、そうした過去の成果に依拠しながら、分層発掘をおこなった。確認された遺構面は4面で、なかでも10層上面の水田は比較的残存状態が良好であったことと、水田面が従来の検出面よりも標高2 m前後というかなり低いレベルを示す点で注目された。今回の調査区は水田面が緩やかに北西に傾斜しているので、さらに低い地形での水田の構築があったのかもしれない。

水田の構造は一筆が10m<sup>2</sup>ほどの小区画であり、その長辺は等高線に平行するように配されており、微地形をたくみに利用して構築された弥生人の水文の知識と技術を窺い知ることができる。いずれにしても10層上面の水田面において確認された北方への傾斜は、先述の湿地への移行を示唆するであろう。

同様な地形は水田層下の黒色土層（11層）以下においても認められたが、この面では柱穴様のピット群と炉址が1基検出された。出土遺物は縄文後期前葉の土器と石器群で量的には少ないが、こうした遺構の存在は、微高地における土地利用形態を考える上で興味深い。

縄文後期には、この小規模なピット群の周囲において石器製作をおこなった痕跡が確認できた。サヌカイトをもちいた石鏃を主体とする剥片石器と、その未製品などから構成される集中区が発見されたが、さらに調査区域外の北方に広がる可能性がある。集中区を構成する石器群は、比較的大型の剥片や石鏃や楔形石器などから構成されているが、石器製作を行う際に生じる微細な剥片類の検出がないのは、調査方法自体に起因する可能性が高い。今後の調査方法上の課題としたい。

ところで、黒色土の堆積は津島地区において、現在までの調査成果から考えて突帯文期から弥生時代前期までの堆積年代が推定されている。今回の調査ではその下部の漸移層に掘り込み面を設けたピット群と炉址が検出され、この付近から出土した遺物は縄文時代後期前葉の土器であった。今回の発見は、構内における数少ない縄文時代の遺構として重要であろう。

今回の調査は事前の試掘調査の成果を参考にして計画されたものの、得られた情報は当初の予測をはるかに越えるものであった。もとより試掘面積の制約や、既設建築物の間を縫うよう

な試掘坑の設定の制約などから、複雑な過去の地形変遷と遺跡の形成過程などは、平坦に整地された現地表面ではまったく予測ができない。今回の調査は試掘成果の活用に関してはより慎重な対応が必要であることを示唆している。

調査の終了後に計画された整理分析作業では、遺構と遺物のあり方から、11層中に検出された縄文後期のピット群や炉址と、その周囲から出土したサヌカイト製石器群が注意された。集中域の全体は今回の調査では解明できなかったが、今後微高地上での活動形態を考える上で少なからず重要であろう。

出土した石器では、石鏃とその未製品と楔形石器や石器製作にかかわる剥片類が主体をしめている。香川県に産するサヌカイトが海を越えて持ち込まれ、ひろく岡山県内の遺跡で石器の素材として用いられている事実が明らかにされているが、縄文時代後期では津島岡大遺跡第5次調査で良好な資料の発見があった(富樫1994)。本地点でもそうした事実を裏付ける事例を追加することになった。とくに剥片と未製品の分類と、それをもとにした石器製作技術の検討は、今後により多くの資料の分析が追加される必要があるが、興味深いいくつかの石器製作に関する特徴を指摘できた。

今回の調査により明らかにされた津島岡大遺跡北側の状況は、今後の周辺地区の調査事例の蓄積をまって構内遺跡全体のなかで総合的な分析が計画される必要があろう。

(阿部)

#### 参考文献

富樫孝志 1994 「津島岡大遺跡第5次調査出土の縄文時代後期石器群の技術構造」『津島岡大遺跡4』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

## 卷末写真図版

弥生時代水田検出状態

11層上面水田検出状態 .....図版一- 1

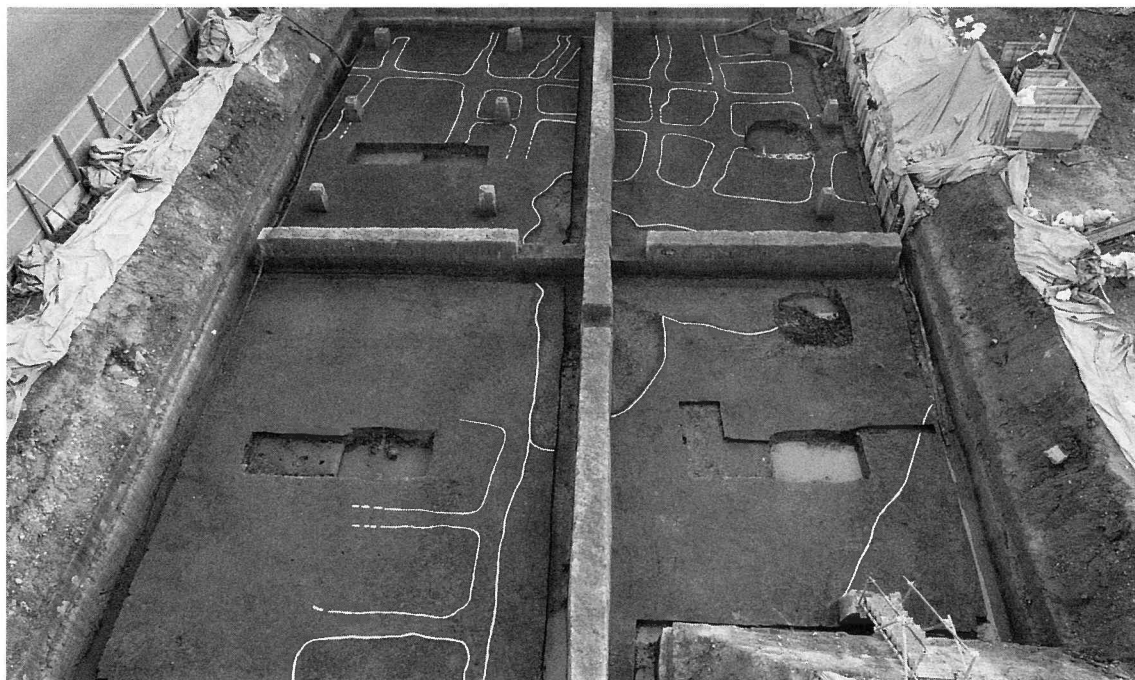
10層上面水田検出状態 .....図版一- 2

縄文時代石器（1） .....図版二

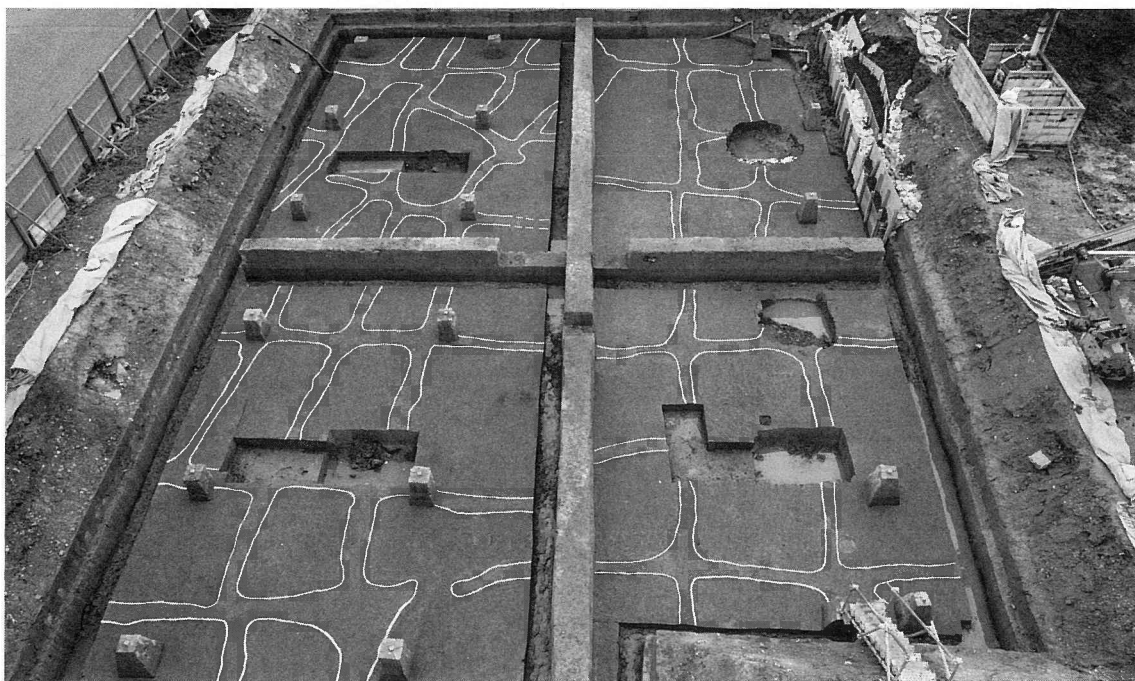
縄文時代石器（2） .....図版三



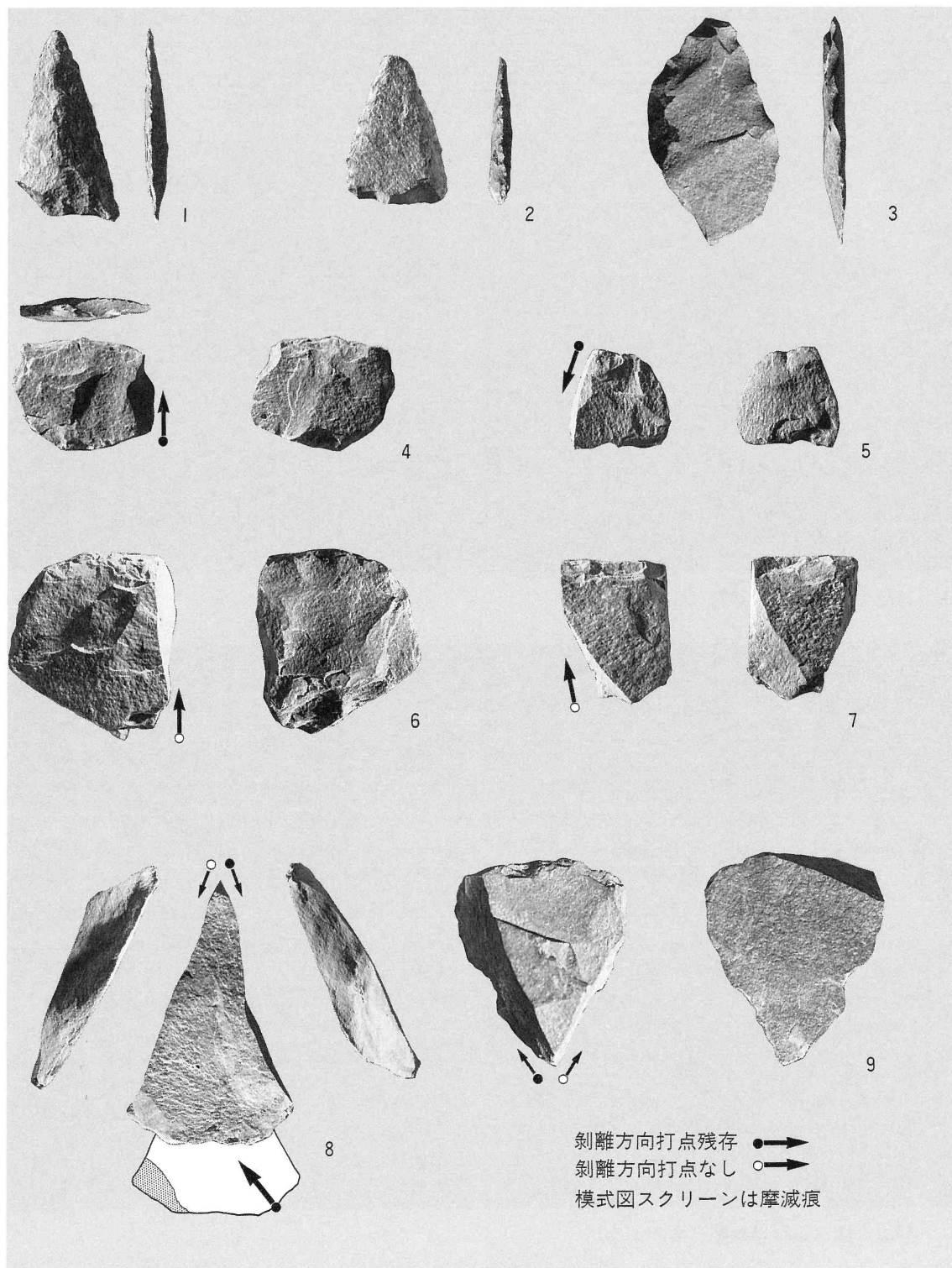




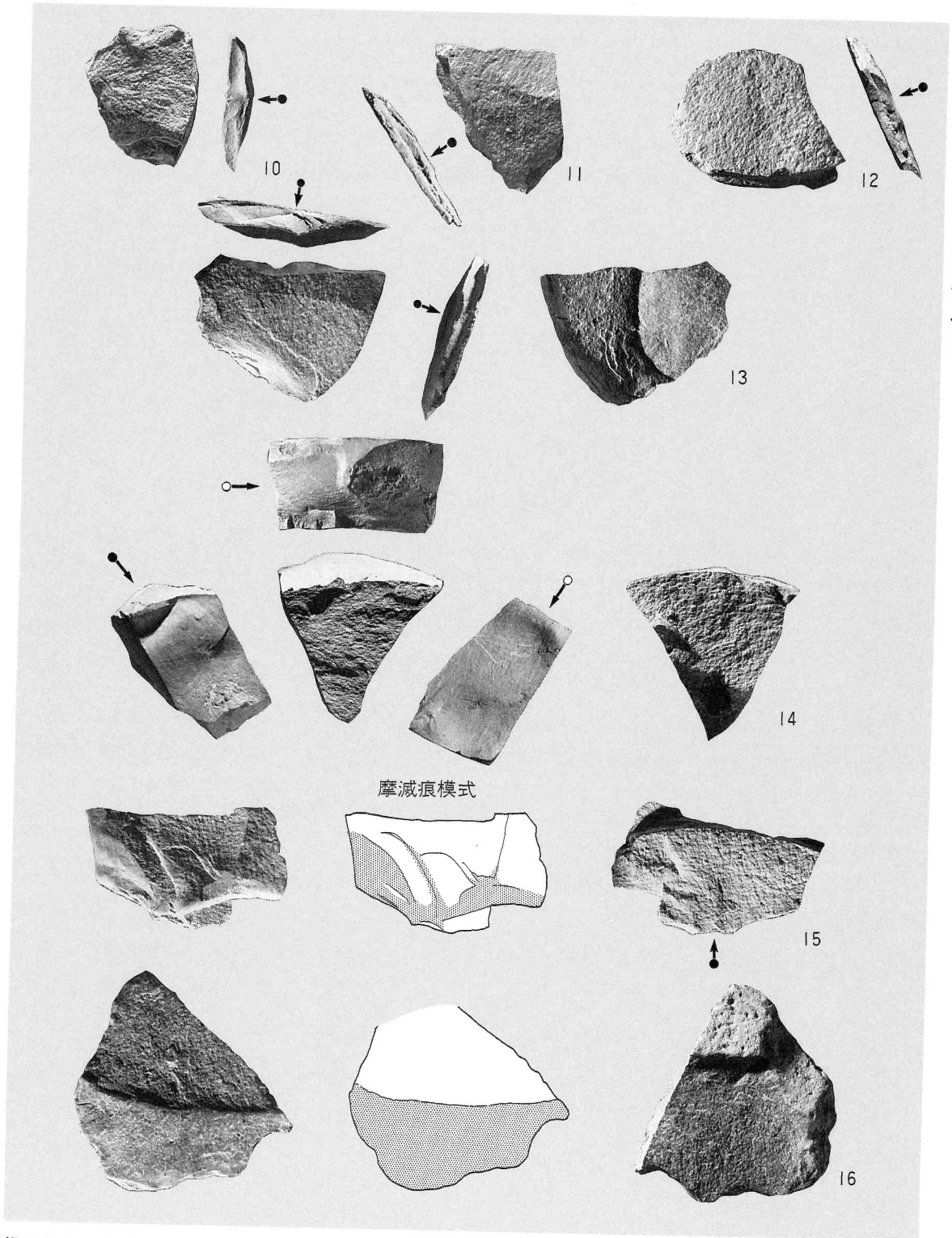
1. 11層上面水田検出状態（北方より）



2. 10層上面水田検出状態（北方より）



縄文時代石器(1) 1-3 石鏃 4-7, 9 楔形石器 8 石鏃片の分割例



縄文時代石器(2) 10-13切断痕のある剥片 14分割剥片残片 15石鋤刃部再生剥片 16摩滅した搔器刃部



# 報告書抄録

ふりがな	つしまおかだいいせき 7 だい11じちょうさ							
書 名	津島岡大遺跡 7 — 第11次調査 —							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番号	第10冊							
編著者名	阿部芳郎、富樫孝志							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所 在 地	〒700 岡山県岡山市津島中 3 丁目 1 番 1 号 Tel 086—251—7290							
発行年月日	西暦 1996年 2 月 29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
つしまおかだいいせき 津島岡大遺跡 だい11じちょうさ 第11次調査	おかやまけんおかやまし つしまなか 3ちようめ 1-1 岡山県岡山市津島中 3 丁目1-1			34度 41分 13秒	133度 55分 25秒	19930914 } 19940111	640m <sup>2</sup>	校舎建設に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
津島岡大遺跡 11次調査地点	その他	縄文時代後期	炉址 1 基 ピット 56基 土坑 4 基	縄文後期土器・石器				
	田畑	弥生時代前期	水田畦畔 1 面 池状窪地 1 基	弥生前期土器				
	田畑	弥生時代中期	水田畦畔 1 面 水田畦畔 1 面	弥生前・中期土器				
	田畑	近世	溝 1 条 畝 1 面	近世陶器		暗渠排水設備		

1996年2月26日印刷

1996年2月29日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第10冊

津 島 岡 大 遺 跡 7

編 集 岡山大学埋蔵文化財  
発 行 調査研究センター

岡山市津島中 3 丁目 1 番 1 号  
(086) 251—7290

印 刷 西尾総合印刷(株)横井支店  
岡山市横井上90  
(086) 254—9001